『帰宅部』へようこそ

昭成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『帰宅部』へようこそ

【Ｎコード】
Ｎ０７０８Ｏ

【作者名】
昭成

【あらすじ】
御鏡（みかがみ）　響（ひびき）はダルがり高校生である。それもとんでもなく。
朝のＨＲこそ遅れないが、その後の授業は全部寝る。
――――起きたら起きたで……起きてる間はアホの全力投球――
――
放課後は、暴力幼馴染や、アルティメットバカ先輩達と『帰宅部』でゆるゆる過ごす。

で、夜帰ってからも……特別夜更かしするでもなく、ぐっすりと寝る。

しかし、その絶賛堕落中だった高校生活に、ようやく変化が訪れる――――

そんな予感がした高校二年の春、出会った相手は――――

――――――――――え？　ストーカー？　ここ、美人転校生とかじゃないの？

1.　登校、出会い編。　それは多分、初めての（前書き）

ジャンル的にはラブコメ……？　のつもりで書いたモノです。嫌いな方はお戻りください。

1．　登校、出会い編。　それは多分、初めての

四月、高校二年目の新学期を迎えてしばらく後、今日も俺は、だるだる～っと、絶賛登校中。

朝のＨＲに遅れたことがないのが、俺のさりげない自慢だ。なぜか目覚めだけはスッキリしている。

まあ、スッキリ目覚めてＨＲもでるけど授業中は寝る。

理由はもちろん……教師の子守唄にアてられるからだろうな。周りも寝てるわけだし。

教員免許でＭＰの行使が許されているんだろう。説教（スリプル）ってヤツかもしれない。

他にも、サムい冗談（ヒャダルコ）、定期試験（メダパニ）、保護者（マダンテ）へ電話……等々、先生ごとに披露される、バラエティ豊かなヤバい魔法の数々、高校生としては、先生方には即刻ＭＰ切れして頂きたいね。要するに、めんどくさい。呪われちまえってことだ。

俺の通っている高校は、自宅（地味に今は一人暮らし）から徒歩で十五分ほどの、都内ではちょっとした進学校という扱いの高校だ。今歩いているのは、そこへの通学路。

とりたてて説明せずとも、普通の住宅街の中、普通な道路に、変わり映えのない歩道、自転車も車も、通勤通学の時間帯だからか、昼間より若干多く感じる程度で、元が住宅街だからか、交通量も大したことはない。まあ、さすがに駅のほうまで行くと、夜通し明るいわけだが、少なくともこの住宅街の辺りには『都会らしさ』ってのはそんなにない。

そんな、誰にでもあるベタな登校風景を通り過ぎ、やや古びた校門前へと到着。

門も実にありきたりなもので、デカい鉄の柵が二つ。それを左右

から、ガラガラ～っと滑らせて閉じるタイプのものだ。しかし、滑るというには、ちょっと重たすぎる物体だが。

そういえば、言い忘れていたんだが、そんなよくある日常の登校中、今日は一つだけいつもと違うことがあったな――――

◇

そう、それは一つの違和感。

本日は、先ほどから――――

――――――誰かが俺を見ている。そんな気配を感じる。

具体的には、家を出て一回二回角を曲がった辺りから視線を感じ始めた。

社会の窓もネクタイも、シャツの襟も問題なかった。靴下も穴なんて空いてない――――って、それは見えないが。

とにかく、俺を狙うのは一体どこの誰だ？

この――デリケートな問題には徹底的に不干渉を貫く人畜無害スト（無害＋～ｉｓｔ）――俺を狙う理由に心当たりが無い。全くもって。これっぽっちも。

しかし、最近の世の中は物騒なものだと毎日のようにニュースで騒いでいることだし、いい加減ジロジロと気持ち悪いので……校門でというのは微妙だが、ストーカーに対処することにする。

できれば気のせいであってほしいな。荒事は好きじゃないし。

◇

――――そこか。

視線の出所を探ってみると、門の端のほうから何やらチラチラと怪しげな――――我が高校の生徒の猿真似をしている――――女子生徒型の生物がこちらを見ている。
実に挙動不審だな。あれでバレないと思っているのか？

ところで、先にも言ったように、基本的には人畜無害、平和主義者の俺だが、当然自衛権は捨てていない。言われもないのに、アレだけガンつけられては、たまったもんじゃないしな。
先んずれば何とやら――というしな。さすがに異性に武力行使は気が引けるから、先制口撃だ。
ちょっと怖い中にも、ユーモラスなオーラ溢れる感じでいこう。今後ストーカーできないようにビビらせて、かつ、面白おかしく終わらせてやる。
――――うむ。完璧な計画だがどこもおかしくはないな。策士ヒビキ――我ながら恐ろしい子ッ……！

俺は早速、まだバレてないと勘違いているらしいストーカーに優しく……身の程を教えてやることにした。
「おい、そこの見知らぬメス猿ッ！　貴様っ！　貴様だっ！！　貴様が、俺を視姦していた愚か者か！？　恥を知れっ！」
「ふぇっ！？　わ、私……？」
奇襲成功、トラトラトラ。会心の一撃っ！
案の定、向こうは後をつけていただけで、こちらからの攻撃については一切合切想定の範囲外だったらしく、非常に驚いている。
そんなビクついている少女をよく見るてみると――――セミロングの髪に、吃驚して不安そうに揺れている瞳。小さめの身長も怯えてさらに小さくなっていて……まあ、胸のほうは小さい身長には不釣合いだが。
月並みな表現だが、ここは正直に、かわいいと思っておく。

かわいいと思うが、その邪な考えと同じレベルで保護欲のようなものが湧いてくる――――うん、なんとも小動物的なヤツだな。
初対面だが、こういうビクビクしているタイプは嫌いじゃない。イジりがいがあるってもんで――――げふんげふん。――――話したら、とっても面白そうだし。
「そう、お前だ。なぜ俺の後ろをストーキングしていたのか、簡潔に述べろ。俺は後ろからよりも前からのほうが――じゃなかった。後ろからつけられる趣味はない。」
燃料投下。思春期の悩めるホンネが出かかったが、テンパってるから気付かれてないだろう。
「……えっ……やっぱり……私？　あれ？　いつから……気付かれて……えっ？」
なにやら女学生型レイヤー（仮）が、不安そうに周囲を見回す……ちょっと目立ってしまって、あわあわしてるのが中々かわいいかも――げふんげふん。

だが、周りの人々は皆、＞＞私無関係です＜＜の構えのようだ。しかし、またタチが悪いことに、それでも見学はするつもりらしい。ビバ野次馬。なんとかと修羅場は江戸の華――って言うのか知らんけど。

とりあえず、ビクビクしてるのが、かわい――げふんげふん。イジりがいがありそ――けふん。――面白いので、もうちょっと会話のギアを上げてみる。
「えぇい、言い逃れは聞かんぞっ。観念しろそこのメス霊長類っ！！　ワケがあるなら言えっ。無いなら神妙にしてお縄に付けっ。つかまった後が心配なら安心しろ。確か、日光に良い猿回しが居たはずだ、シャバに戻ってからの就職先は一緒に探してやる。希望するなら野に離してやってもいいぞ。」
俺も悪じゃないからな。アフターフォローは欠かさない。罰の後

はフォローもしっかりと行う。これこそが再犯を防ぐ秘訣だと思うね。見習えよサツどもっ！

「……え……あれ？　……やっぱり、見た目は『あの時』の先輩だ……あれ？　でもこんな感じの人じゃないような……うぅん……あの……えっと……とりあえず……言います……あの――――」

何やらブツブツとつぶやいている。よく聞こえなかったが、最後に『あの――』といったのは聞こえた。

不本意なことに、俺の発言への突っ込みは頂けないようだ。

だが、この新入生風の少女がなにやら自白をはじめようとしているようだというのは伝わった。

ちなみに『センパイ』と言うとおり、よく見ると制服のコスプレは一年生風だ。初々しさまで、まるで本物の新入生のようなのが凄いところだ。

普通に本物の新入生がストーカーかとも思ったが……入って一月すら経ってないのにストーキングってのは、さすがに正気の沙汰じゃないしな。

――ちなみに、ネクタイや、上履き、体育館履等のカラーによって学年が分かる。赤、青、緑の三色がある。学年で年でローテーションが組まれており、俺たち二年は青、三年の先輩は赤、一年生なら緑だ。これは卒業まで変わらず、来年の新入生は、今の三年の替わりに、学年カラーとして赤を使うわけだ。以上、説明終了っ！

――――

ささ、説明も終わった辺りで、話の続きを聞こう。いよいよストーカーの犯行動機が明らかに。

「あの――先輩。……実は……あの……先輩が＞＞あの時＜＜言ったとおり、ちゃんと私、高校生になったので……今日こそ伝えます！　お願いします。先輩、私と――――」

俺、何か言ったっけ？と前半を聞いた時点で考えていた。
そして、後半は何やらごにょごにょ言ってるなぁと思った――

――その時だ。後ろから無駄に高い、二次元少女みたいな声が聞こえてきた――

「――――朝っぱらから何やってんのよ！！　アンタは！！」
「――あおッ？！」
アニメで聞いたみたいな高い声が響いたと思ったら（声優さんでもやればいいのにって思ったくらい）　次の瞬間――――俺の側頭部に得体の知れない衝撃が走っていた。ゴム弾で狙撃でもされるとこんな感じなんだろうか。
結果――――見事なハイキックと共に、俺の意識は刈り取られていった……。
ああ、衝撃の正体は、足だったんですか。甲のあたりがキレイに当たってるな。対象が俺だから全くもって笑えないけど。

「……先輩……もしかして覚えてない……？　それとも、気付いてない……？」
そんな声が正面のヤツから聞こえたような聞こえないような。
でも、そんなことよりも、俺――いや、僕は今……すごくねむいんだ。おやすみ、パトラッ――――

そうして、俺は本格的に意識を失った。
あれ？　結局なんであの後輩（仮）は、ストーキングしてきたんだ……？

◇◇

ここは……？　あ……あれ？　俺、ハイキック……？　そうだ、ハイキック！！　蹴られた、ということは――――

「――――ハッ！？　つまりは敵襲か！？　誰ぞある！！　武器をとれいっ！！」

とりあえず殿様風にワンセットボケてみた……が、ツッコミは全く無い。

って、誰も居ないのか？　意識取られた意味ないじゃん。まあ、スプラッタ展開じゃなくて良かった良かった――てわけで、起きるか。

ある程度しっかりと意識が戻ると、はっきりと、現在地が分かってきた。どうやら俺は学園の……体育館の裏に寝かされていたようだ。

うちの高校の体育館裏は、例えば血気盛んな皆様がカツアゲでもしそうな、薄暗い場所。というよりは、ちょっとした庭みたいになっている。

庭？　は、それなりに管理が行き届いていて、イチョウだかケヤキだかの木や、名前は知らないが、よく見かける花も見えている。

そういえば、園芸部とかがあったはずだから、活動場所のひとつなのかもしれないな――――

――――ってそうじゃないな。現状の把握に戻ろう。

なぜか相手が気を使ったのか、気まぐれなのか、幸いにして俺が寝かされて（むしろ置かれて？）いたのはコンクリート部分であった。土まみれで登校……は、しなくてすみそうだ。

しかし、無事登校といきたいが疑問が残る。このまま何事も無かったことにするのは癪だ。
「一体、どこのドイツが蹴りなんぞ……下手人は誰だ。待ってろ。見つけ出して、そのクセ者を引っ立ててやるぜ」
さあ、覚悟完了！　ストーカーの動機は置いておいて、まずは、蹴りの犯人探しだ。多分、迷惑防止条例＞暴行罪だしな。暴行罪で訴えてやる。国家権力なめんなよ……使ったことないけど。
「どう見ても、ア　ン　タ　のほうが、クセ者よッ！！！！」
またしても声がした――――先ほどのストーカー少女が、しっとりとした感じの声表現するなら、こっちは、まるっきりの高音アニメ声。なんか深夜アニメとかに出そうだな――――
――――と思ったと同時、先ほど喰らったところと寸分違わず、今度は正面に回り込まれてから、同じ位置にもう一度、ハイキックが納められた。
ズガン！　と音がした気がするが、聴覚が一瞬で意識の外にいくほど、蹴りそのものの衝撃のほうが大きかった。足刀で足頭部を、なんてね。
「――うわぉぅっ！！？」
情けないリアクション音声と共に吹っ飛ぶ俺――――あ、でも、今度はしっかりスカートのその先まで見た。蹴られておいても反応できるのは思春期男子の特殊能力なんだろうか……？　それは清純の象徴、穢れなき――――
「――白かっ……た？」
「んなっ――」
どさっ、と倒れた際の俺のダイイングメッセージに反応したのか、少女が真っ赤になって固まった。まるで顔に火が――――なるほどね。こういうときに使う表現なのか。
それにしても、さっきは、いきなり蹴られていたため余裕がなかったわけだが、改めてよく見てみると、結構な美少女である。
西洋の血でも入ってるのか、それとも染めてるのか、金髪っぽい

ツインテールのチビッ子。かわいい人形が、そのまま命を得たような――――間違いなく美少女だ。外見だけなら、な。
そのテの人なら間違いなくファンクラブとか作るんだろうな。
などと思っていたが、目前の般若は、そんなことはお構いなしのようでして――――
「～～～～～～～っ？！　もしかして、アンタ……見……あたし……見ら……れ……って……この……お、お……おっ……おっ……おっ、おっ――――」
うん、少なくとも俺のデータベースだと、こんな珍妙な言語に該当するのは、たぶんオットセイ辺りじゃないかなと思う。せっかく進化して二足歩行になったというのに、四足どころか、わざわざ這いつくばる生き物を選ぶとはな、この玄人すぎるチョイスには、ダーウィン先生もびっくりだろう。
この美少女は――――――――俺が懸念したとおり、外見はともかく頭の中については――――――――いたく残念なようだ。

ん？　そういや、このチビッ娘――――
――――そうだ、こんな感じの金髪チビに見覚えがある。
たしか『アイツ』の出身はドイツだったか……？
で、その上ツインテールに、線の細いチビッ子、そして先ほどのアニメ声、そして……蹴り（暴力）。

――――確信に至った。俺のデータベース上に一人いた。部活＞＞帰宅部＜＜の同級生……小学から一緒の幼馴染に、こういうのが居る。
気が強くて、すぐ拗ねて、暴力ふるって、そのくせ実は寂しがり屋な――――――
――――――いや、でも、今はそれより大事なことがあったはずだ。思い出せ……

――――そう、白、白だ。白い何かを見た気が――――あ、思い当たるものがあった。考え続ける人間には、知恵の神も優しいようだ。知恵の神様より、典型を授かった俺は記憶の底から大事なものを思い出す。

あ、そうだ、パのつくやつだ……。そうでしたね。

＞＞食べられないパン＜＜のクイズでたまに答えるやつがいるかもしれないアレ。

「――――おっ……おっ……おっ……」

あるいは、拍手を二回――――パンッ、パンッ――――

――――――――その心は

「おっ……お、大馬鹿ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

「雪乃（ゆきの）、ちょっと、待っ――――ぎゃあああああああああああああああっ」

三度目の蹴り。またも側頭部。お願いだから違うところを蹴って下さいっ。このままじゃパンチドランカーならぬ、キックドランカーだ。

「――――――ぐべらぼっ！！？」

蹴られた衝撃で、まさに、離陸した飛行機のごとく、そのまま吹っ飛んだ俺は、見事――幸いにも花を植えてなかったらしい――花壇に胴体着陸を果すこととなった。頭から胴体着陸である。

そういえば、皆が言っていたよな。『コンドルが、めり込ンドル』……飛んで、めり込む。

貴重な実体験をすることとなった。

そして、最後の気力を振り絞って意識を保った俺は推理ドラマの被害者ばりに、悲劇の爪痕を示すものを残すべく、倒れた地面にこう書き残す。がりがりがり、と。

ぱ

ん

――（もう一文字は掠れていて見えない）

その後、目が覚めたのは昼休みだった。

俺の長所――ＨＲに遅れない――は、見事に消えた。

だから俺は誰にともなく、こう、言ったんだ。

――――『事件の後は、アフターケアこそが大事なんです！』

◇◇

「あれ？　何で俺土まみれで倒れてるんだ……？　ストーカー追いつめて……あれ……うーん。」

実に間の抜けたような声。まだ、記憶があいまいなようだ……しっかり忘れたんでしょうね。アイツ。

全く、『帰宅部』の朝練――といっても、基本ダベってるから欠席でも怒られないけど――サボるわ。新入生にわけわかんないこと言って困惑させるわ、校門前で騒ぐわ……その挙句に、アイツの暴走（カ）を止めてあげたっていうのに、その……見られちゃったし。

「いってぇ……まだ痛いぞ。畜生、雪乃のヤツ。って、何で雪乃？
蹴ったの雪乃だっけ？」
――――ざまあみろ、アタシの……あの……アレ……の対価は、そんなに安くはしてあげないんだ。どうせ責任も取ってくれないんだし、そう、そうやって記憶ごと失えばいいんだ！
ぁ……でも、もし、覚えてたら……もしかして……責任……取って、くれる、の――――――
――――って、ああもうっ、何考えてるのよ、アタシは。
ふるふるぶんぶんと首を左右に振って少しでも気を紛らわす。ああぁぁもうっっ！！！！
何でアタシが悩まなくちゃいけないのよ……普通、こういうの……は、『アンタ』が悩む側でしょ……。　アイツが幼馴染のアタシ以外に、女の子を連れてるところなんてあるかと考える。いや、記憶の限りでは、ない。それも全く。まさに非モテ代表ね。今流行の草食系……だったかしら。むしろ、あの鈍感魔は、僧職系よね。
自分で言っておいて、くすっと吹き出してしまった。やっぱり、色恋なんてアイツにはまだ早い。

――――あのバカには似合わないのだ。全くもって。
今夜ばかりはイタズラしてやろうかしら。
と思ったが……やっぱりやめた。
夜中の間は、アイツはメールも電話もシカトする。朝になったら反応するあたり、どうせ授業中のように何も聞こえなくなるほどの勢いで……寝てるんだろうけど。

ふと、意識がもう一つの『できごと』に向く。
そういえば、あの子……何かアイツを『知ってた』ような素振りだったわね……。
知り合いなのかな？　違うような気もするけど、知り合い？

だったらイヤだ。何でかは分からないけど――――イヤだ。

◇◇

さて、私の今日を振り返るために、『日記』をつけようと思います。

いつも、その日の出来事を書くだけ。ごく普通の日記。

でも今日は、ちょっとだけ長くなりそう……かも。

『四月　☆日　晴れ』

『今日やっと、あの人に会えた。＞＞あの時＜＜私を救ってくれた＞＞あの人＜＜が。でも、どうやら覚えてはいないみたい。』

『今日こそは挨拶しようと隙をうかがって家の近くで待ってみたけど――――印象に残っていなかったのか……私のことは覚えていなかったみたい。ストーカーって言われちゃった……。』

『そういえば＞＞あの時＜＜とはずいぶん印象が変わってたな。……もしかして他人なのかな？』

『でも……仮に他人だとしても……もう少し話してみたいような気もする、かな……？』

少女の部屋の机には、日記帳と一緒に一枚の紙が置いてある――――

◇◇

――――入部希望　1年　A組　萩野　秋穂　入部希望部『帰宅部』――――

この紙切れが俺に――――変化をもたらされそうとしていた。

1．　登校、出会い編。　それは多分、初めての（後書き）

先に謝っておこうと思います。
読みづらかったら、すいません、なにぶん初めて書いたものなので……。
ラブコメ？　的なものを書いてみたいな～　っと思ったので、初めて小説書きました。それがコレです。
記号やら文字やら、どう使っていいものか分からず……うぅん難しい（言い訳）

読んでくださった方にはどう見えたていたのやら、小説って書くのは大変なんですね。
指摘、感想、まさかの要望などありましたら、どうぞよろしくお願いします。

と、とにかく……

ここまで読んで頂いた貴方。一人でもいらっしゃれば……ありがとうございます。

……あれ、てかよく考えたら1話時点で『帰宅部』全く関係ない……？
なんてこと……次で出します…多分。

2．　俺を埋めたのは誰だ（前書き）

ストーカー撃退後の記憶が無い……。

俺は何故気絶していたのか――

――俺は何故、花壇に刺さっていたのか。

――――真実は、いつも一つ！（全く推理モノではありませんので悪しからず）

2．　俺を埋めたのは誰だ

小動物的なオーラ漂うストーカー女を撃退、その後……何があったのだろう。気がついたら――――

――――気がついたら、何者かの陰謀によって花壇に刺さっていた。

俺は現在どうしようか考え中。むしろ、俺の人生がどうなってるのか考え中。

中々貴重な体験をしたともいえるが、さすがに納得いかない気分だ。そういう趣味じゃないし。

なんにせよ、おかげさまで、自分の長所――ＨＲに遅れない――は、俺の下からどこか手の届かないところに飛び立っていった。さようなら、二度と会えないけれど、お元気で。

そんな、どんより気分の中、お昼の放送と称して、最近良く耳にする――最近流行っているのかね――歌が、垂れ流されている。

つまり、もう昼休みか……。

◇

「ったく……。ストーカー問い詰めたはずが、何故俺が地面に埋まってたんだ？　つけられて埋められて――――不幸すぎるだろっ！」

思い出すだけで何ともいえない気持ちになる。悪い意味で何もいえねぇ。

とはいえ、考えなければ、この奇妙な目覚めに答えが出ないのも事実。

よし、推理小説だか何だかで使うという『誰が？』『なぜ？』『どうやって？』……三つの『なんたらダニット』

それを俺のケースに当てはめよう。

一体誰が、なんで、どうやって――――俺を花壇にぶち込んだんだ？

――――って難問過ぎるだろっ！　ホームズとワトソン君も裸足で逃げ出すわっ！

……いやいやいやいや落ち着こう。

つまり、状況纏めてみると、なんだ？

俺は登校中の視線の正体を探り、校門前でストーカーを発見。

追い詰めて、ようやく自白寸前ってところで視界が暗転――――

気絶したんだよな。

暗転なのに、何故か景色は『白かった』ような気がするが。

――そしてその後、目が覚めたら、地面に刺さってましたとさ。

めでたしめでたし。

「……って、んなわけあるかボケコラァッ！！」

思わず、セルフツッコミ。どんな超展開だよっ！　一時間の推理ドラマですら、ここまでハショらないだろ！？

この酷い展開は、そう。オープニングが終わったら、次回予告が出たような感じだ。推理は？　犯人は？！

……実に酷い。

さて、話を戻して……

「どうするか……。選択肢としては、『午後から授業へ行く』『ここまで来たら、サボり続行』『サボり？　むしろ帰ろうぜ、もう』と、こんなところか」

しかし『授業へ行く』は、却下だな。
理由は長いが、要約すると単純だ。普通の精神構造した人間が、遅刻した挙句土まみれで授業行けるか？　『どうして遅れたの？』『気が付いたら花壇に刺さってました』
うん、俺はムリだね。――『先輩』ならやりそうだが――うん、やっぱ俺はムリ。よって却下。

ここは、選択肢『サボり続行』と『帰宅』の折衷案でいこう。
つまり、家に帰って制服を変えて、そして戻ってくる、と。
たしか今日は二時半頃（五時間目）には授業も終わるはず。
そこから『帰宅部』へ行けばいいだろう……。

さて、移動開始ッ！

◇◇

『1年C組　御鏡　響　あなたは、部活動への所属希望が未提出です。今月中に各部担当顧問又はクラス担任へ、入部希望届を提出するようにして下さい。※未提出の状態が続くと、進級が不可能となります。』

ここは掲示板。今は、十月の某日。日が沈むのも、ずいぶんと早くなった。
何やら、気が付くと俺の目の前に、いたく絶望的な文章が掲示されている。
水を求めて、砂漠を彷徨い……そうして、求めるうちにビスケットでも発見したらこんな気分になるんだろうか。知らんけどね。
いやだって、部活動って自由じゃないの？　高校生なんだからさ……。
ゆるゆるだるだる過ごしたい身としては、まさに死活問題だ。眠いし。
入学時、『特待』の枠に申し込んでみたのが悪いらしい。生徒の見本として部活へ所属しろとさ。
まあ、金は毎月送られてくるから、実際は普通の生徒でもいいんだけど、一人暮らしだから一応って理由で――――申し込んだら普通に通った。実は優秀なのかもな。俺。

まあそうして、偉大なる苦労人、二宮先輩を見習えとの学園からの圧力により、絶望の淵に沈められている俺に、ふと、聞きなれたアニメ声が響く。
「く……ふふっ――アンタまだ部活入ってなかったの？　入学前のパンフでも『特待はクラブへの入部が義務』って思いっきり書いてあったじゃない。たまに特待生向けに『部活入れ』って放送も流してたし」
なにやら、笑いながら雪乃が話しかけてくる。ドSな暴力娘にとっては、他人の不幸が楽しすぎるらしかった。
「何を言うか、雪乃さんや。パンフなぞダルいから読まんわ。それに放送だぁ？　……俺がいつも、どうしてるのかは知ってるだろ？」
すなわち――睡眠学習。
「ああ……そうよね」
ご理解いただけたようだ。分かればよろしい。

「で？　どうするの？」
『ぶ・か・つ』と、わざわざイヤミったらしく区切って付け足してくれた。俺をイジめてそんなに楽しいか？
とはいえ、入らないと特待落ちで困ったことに――――ではなく、進級すらさせないときたもんだ。
半年分既にくれてやったんだから、しっかり対価は払え――ってことか？　セコい学校だ。
「どうするかなぁ……。この際だから、転校とかでもいいかもな。逃げられたようなもんだが、親元に帰る口実にもなるかもしれないし」
そう、金の工面に忙しいわけではない。
といっても、一人暮らしも中々めんどい。主に家事全般。
料理くらいなら、雪乃が気まぐれでやってくれることもあるが、近場にいるだけだ。やはり基本は全部俺である。
「え……ちょっ……待ちなさいよ！　何でいきなり転校なのよ！　部活入る事考えなさいよ！　転校なんて……、転校なんて、何のためにこの高校入ったのか……分からないじゃないの！！」
いきなり雪野の声の音量が上がった。ずいぶん興奮しているが、そんなに転校させたくないのか？
……まあ、そうだよなぁ。
部活に『所属』だけでもすればいいんだから、普通に考えて、そのほうが楽だよな、やっぱり。
「……そうだな。親追いかけても仕方ないしな。しかし、『転校するな』なんて――――わざわざ、俺が楽になりそうだと思う方を教えてくれたんだろ？」
ダテに付き合いが長いわけじゃないんだな。そういう気遣いは正直……嬉しいぜ。ハズいのもあるけど。
「やっぱお前、俺のこと分かってくれてるな。参考になるわ……サンキュ」
めんどくさくない方を示してくれた雪乃に、珍しく感謝の言葉な

んか言ってみた。
「……アンタは……やっぱ全然分かってないじゃないっ……！
……って何がかしら……？」
しかし雪乃の方は、なぜか不満げな様子だ。何がお気に召さなかったのだろうか？
後半の『何がなのか』については、逆に俺が聞いてやりたいくらいだがな。
いや、待て。考えてみれば……あるじゃないか！
雪乃くらいの青春真っ盛りの女の子（同い年だけど）が、悩んでる事といえば――――
そう、『アレ』だ――――俺の脳は、一瞬だけだが、ノーベル賞ものの処理速度を発揮していた。
――――思春期真っ盛りの女の子が、俯きながら赤面して……恥ずかしいのか、中々言い出せなくて、モジモジとしつつ伺うように、こちらをチラッと見ている。
――――このリアクションは、『アレ』に違いない。
「いやすまん。ようやく理解したわ。要するにお前――――」
軽く謝って、もう一度雪乃に告げる。
全く……俺のように『鋭い幼馴染』じゃなきゃ、こんなこと気付いてもらえないぜ？　俺が鈍感野郎じゃ無くてよかったな。
そりゃあ、言い出すのは恥ずかしいかもしれないけど、思春期の女の子なら、一度は通る道だろう。

なあ雪乃――――――――ずっと言い出せなかったんだろ？
なら、男の俺の方から……言ってやるしかない、よな？

「――――女の子（そういう）の日ってことだろ？　女の子は大変だもんな。」
「雪乃。ハッキリ言うのは恥ずかしいかもしれんが、キツいときは無理せず言えよ？　……幼馴染だしな。俺にできることなら、いつでも助けになってやる」

「〜〜〜〜〜っ！　アンタねぇっ……！　またそうやって人のことを馬鹿にして……っ！！！」
精一杯気遣ったつもりが怒られた。
何でだ？　あれ？　てか今、俺が雪乃のこと馬鹿にした要素あったか……？
「ん？　なんだ？　それともやっぱり――恋の悩みか？」
「……っ！」
どきり、と固まる雪乃、図星みたいだ。いいですねえ、青春青春。なんだか今のコイツ面白いな。
「気になる相手が居るんだろ？――――言えば俺が調べてやるぞ？」
「〜〜〜〜っ！！　そう……そうよね。多分……やっぱりアンタの……なのかも……ね……」
今は俺の身の上話じゃなくて、お前の好きな相手の話だろうに……。
それで、俺？　ってことは――――
――――あ、そういうことか。全く、それならもっと早く言ってくれればいいのにさ……。
曲がりなりにも、多くの時間を一緒に育ってきた……幼馴染なのだから。

「もしかしてお前、俺――――」
「……っ！？」
二度目の、どきりというリアクション。雪乃さん再度フリーズ。雪がフリーズ……なんてな。
「お前、俺――――――――――――――――の知り合い紹介してほしいのか？　オッケーオッケー。なら任しとけ。お前は外見なら、ちっちゃい以外ほぼパーフェクトだからな。イケメンから秀才頭脳派まで、それなりに知ってるから、よりどりみどりだぜ？」

そう言って雪乃のほうを見る。すると……

――――アラ不思議。イケメンを斡旋してやると伝えただけで……

「～～～～～っ。ホント……ホントに……アンタはっ……！！」

――――素敵な『修羅』が、一匹出来上がりました。え？　ココ怒るところだったのか！？

「全っっ然！！　分かって！！！！　ないじゃないの――――――よっ！！！！！！」

「――――――って、俺が蹴られる展開かよっ！？――――――――ぶべらッ！！」

ガッ――ガッ――――――――ゴンッッッ！

怒りの咆哮のような気合が入った声と共に、下段で崩して、さらに二回。

見事な三連まわし蹴り。ついでに言うなら、最後の一撃は……小さな頃からお約束――――側頭部へと、寸分違わず吸い込まれた。

そんな、強烈な三撃――これはむしろ、惨劇といったほうが良いのかも知れない。知らんけど、多分。

ああ、トぶな……と思うと同時、景色がブラックアウト。

この時の景色は、ちゃんと『黒』だったんだよな。

◇◇

ここは……？　そうだ、屋上いこうとしたら開いてなくて、んでもう一回体育館裏で寝たんだっけか。

それにしても、ずいぶん懐かしい夢を見たもんだな……。

半年くらい前だったか？　俺が『帰宅部』に入る直前の出来事だ。

ついでに言うなら、今の夢もそうだが、なんかアイツに会うと必ず蹴られてる気がしてきた。

雪乃は、もう少しお淑やかになってくれないかね？

西洋の血が入ってるってのに、淑女（レディ）の血は、お袋さんの腹に忘れてきたようだ。

もしかしてドイツだと違うのか？　まあいいけど。

――――思えば、ああやって既に、蹴られることにも気を失うことにも耐性がついていたからこそ、俺は花壇に刺さってても平気だったんだろう。

精神的にも肉体的にも、鍛えられていたらしい。俺は喜べばいいのか？　いや、ここ悲しむところだよな？

あれから結局、あいつに紹介されて『帰宅部』に入ったんだよなぁ。

もう半年になるのか……って今何時だ？

ふと、時間が気になったその時――――きんこんかんこん、と、チャイムの音が聞こえてきた。

昼休みに起きてから、家に行って帰ってくるのが三十分として、再登校して寝たのが……って、やべっ。もしかして今の、五時間目どころか六時間目終了チャイムか！？

あわてて校舎側へ向かい時計を見てみると、やっぱり針が示すのは三時半。遅刻確定ですね。

サボるか？　って考えも浮かんだが、さすがに再登校して再サボりは、中々受け入れがたいので部室へ向かうことにする。

部室の場所は、四階建て校舎の二階にある。

三年の教室がＡ・Ｂ・Ｃ……と並ぶ中を奥に進んで、組にするとＪだかＫだかＬ組だかになりそうな――――――空き教室にたどり着く。

周囲には使われている教室も無いらしく、しん、とした空気が漂っている。

さあ、いい加減部活へいこう。帰宅をやめて、『帰宅部』を選んだのだから。

いい加減『帰宅部』に入らないと、話が始まらん――――――って、何の話だ、何の。

コンコンコン、ガチャ――――――

「皆様、おはようございま――――」

言いながら思いっきりドアを開ける俺。遅刻してしまった以上、キビキビといこう。挨拶はハキハキ、ドアも盛大にオープン！

――――ゴチン。

おお、いい音したなぁ……って、『ゴチン？』

「――――はぅあっ……！？　っ～～～～！！　～～～～っ！！」

続いて響くアニメ声と、ちらりと見えた金髪。

そして、その後の悶絶したような声にならない音声。てか効果音？

すごく、ものすご～く……イヤな予感がしますね！　コレは。

「……ねえ？」

俺はオカルトは信じているほうではないけれど、今の目の前の御方（MA）からは、ゴゴゴゴゴ、と音が付きそうな、何かオーラ的なものが（U）

見える気がします。
悶絶して、ふるふる揺れていたツインテールも……今は威嚇する猫みたいに逆立ってますね。オットセイの次は猫か？　あれ？　雪乃のオットセイの鳴き真似なんか見たっけ？
「……ねぇっ？」
間が空きすぎて、無視したと思われたかもしれない。これ以上の燃料投下は俺の命に関わるぞ！
「はい、なんでしょうマドモワゼル……？」
毛を逆立てて威嚇してるのが猫とは限らない。猫科なだけだ。さしずめ、今のこの子は猛獣っ！
「いっつも……いっつもいっつも……、アタシの前に来るたびにイタズラして……っ！」
めっちゃ『してねぇよ！』って言いたいっ！　でも言えないっ！
この気持ち気付いて！？
この空気では、きっと真実など――――検察（雪乃）に握りつぶされるに決まっているのだから。
「ねぇ、そんなに……アタシのこと嫌い？」
オーラでは威嚇しながらも、若干思いつめた表情と声をしてらっしゃる。心なしかツインテールもしょんぼりとしてるような気がする。
こういう時の、この子の扱いは慎重に、穏便に！！　でないと――――
「いえいえ滅相もございません！　そのようなことがあろう筈がございません！！」
「……そ、じゃあ次ね。……質問を変えるわ」
ホッ、峠は越えたらしい。ええ、誠心誠意、どんな質問でもお答えします。
「――――どうやって死にたい？」
前言撤回っ！
――――そう、でないと――――悪魔、が……やって来てしまっ

たッ……！！

「え……えぇぇ！？」

ぶっ飛んだ『質問』に驚いたリアクションを作ってみせているが、俺は既に悟りきっていた。

腐っても幼馴染。今の雪乃（アイツ）を見れば分かる。許す気なのか、そうでないか。

覚悟はできたか？　俺はできてる。もう切腹前のサムライの気分だ。幼馴染とは――――死ぬことと見つけたり。

そう、あの時、『扉を開けた』

もうその時点で、バッドエンド直行の――選択だったのだ。

「まあ、アンタの答えは聞いてないの。じゃあ――――さような……らっ！！」

――――有罪（ギルティ）っ！！

そうして放たれる一太刀――――と錯覚するような足。足刀で側頭部……って今はそうじゃない――

――――――――ガッ！

「ぐほぉぅっ！？」

ほら、ね？

人間って、こんなに簡単に、トんじゃうんだよ……（いろんな意味で）

そしてまた景色が消えていく。

お、今回のブラックアウトは『紅く染まる』らしい。

ってことは、流血でもしてるのか、それとも『何か紅いもの』でも、目に入ったのだろうか……？

――ところで俺は今日、いったい何をしに学校へ来たのだろう？
再登校、再昼寝、そして再度、蹴られ――

ん？　再度蹴られ――――そうかっ！！

アイツだ！　アイツが――――

――――俺を花壇にブッ刺した……犯人……かっ！

『花壇生き埋め事件』

犯人は『蘇芳（すおう）　雪乃（ゆきの）』

『事件解決！！』（BAD END）

判決――――被害者『御鏡（みかがみ）　響（ひびき）』――――有罪

その後、めでたく再気絶。
最近、よく気を失う気がするんだが。これはどういうことなんでしょう？

あ、そうか。

これが、テレビで見た『大殺界』ってヤツなのかね？

2. 俺を埋めたのは誰だ（後書き）

スイマセン、また部室に着けませんでした……いや、一応着いたか……。
ちょっと遊んで動かしすぎたのかもしれません……。
二作目にして早くも暴走。いや、一からだったのか……？

ここまで読んでくださった方。
マイ脳汁の垂れ流しに、お付き合い頂いて……ありがとうございます！

ついでに、ここの表現変とか、文字やら記号やらおかしいでしょ？
ってあったら、教えてくださると嬉しいです。非常に参考になるので

この誰得な日常を描いた小説に……次回を待ってくれる人は居るのか……？
などとネガティブしつつ……今回はこの辺りで。

あ、多分、次話からは、ボンボン新キャラが出ると思います。
内容によっては名前がボンボン出る可能性もあるので、時間かかりそうですね……

3．『帰宅部』の日常（前書き）

気絶した響を、見ていると、雪乃は――――

そして、部長も登場。『帰宅部』に変化の兆しが……。

3．『帰宅部』の日常

◇◇

「……全く、コイツはホントに……っ」
気絶してる響（バカ）を前に、一人ごちるアタシ。
最低よっ！　何考えてるの！？
人の……人の、その……『アレ』覗くわ、授業サボるわ、部室で待ってても全っっ然来ないわ……
つまんないじゃないっ！
痺れを切らして、探しにいこうとドアに向かったと思えば……。

『（ゴチンッ）――――っ～～～～～！　～～～～～っ！』

思い出したらまたムカついてきた……。もう一回コイツを花壇に埋めてやろうかしら？
でも、そろそろ起きるかもと思い反応をうかがってみる。
「ちょっと、起きなさいよ。もう一回埋めるわよ？」
「う……うぅん……。うぅん……。」
つんつんしてみたが、まだ起きる気配はないみたい。
それにしてもコイツ、普段がブッ飛んでるから気付かないけど、改めてよーく見てると、何だか……。
「ってそうじゃなくって……っ！」
ブンブン頭を振り回し、一瞬よぎった何ともいえない感情を吹き飛ばす――
「……ねえアンタ、起きないと……」

――――吹き、飛ばない。全く、飛んでいかない……『何か』が。

「早く、起きないと……アタシは……」

――――気付いたらアタシは……アイツに向かって――――

――――――――ガタンッ

「おはよう部員諸君！　先発の柱兼リリーフエース兼パーフェクトクローザー、ウジハラ――約束の犬――が登場だ！！！　テメエら盛大に宴の準備をっ！！」

突然ドアのほうから大声。同時に、痩せ身だがそこそこ背の高い――アイツよりちょっと高いくらい――――の、男がひとり。

「ひ――――――――っ！？！？」

声にならない声が出た。

見られた……見られた！？

今アタシは一体何をしそうになったのかしら……？

「む？　雪乃一等兵か。どうやら今日は……お前さんだけですか？　ホームルーム後アローンですか？　寂しいなおい！！　青春しろよ！　萌え上がれよ！　溶けるぞ、雪！」

「部長、もう一人ここに転がってます。それと何なんですか一等兵って。しかも溶けません雪じゃありません雪乃です寂しくなんてありませんっ！！」

――――とても、とっても焦った――――――が、それも一瞬で冷めた。

『部長（バカ）』の登場で、一気に冷めた。トンネルを抜けたら南極だったような気分ね。

それにしても、何でこの人はいっつもこんなにテンション高いの？

宇治原（ウジハラ）　晴樹（ハルキ）　……『帰宅部』創立者にして、名誉会長（自称）、宴会部長（自称）、パーフェクトエンターテイナー（自称）

要するに、響（アイツ）を遥かに凌ぐ――――――――――バカ。

「おやおや、ヒビの字はまたまた気絶中か。しかし、スノーマン。ヒマだからとはいえ秋の夕日に黄昏るのは止めたまえ。そんなに生き急ぐと溶けちゃうぞ？　雪は大人しく冷凍庫に入ってなさい。もちろん業務用のデカいやつに。呼んであげるから、冬になったら出ておいで」

ほらね。やっぱりバカ

「溶けないって言ってるじゃないですかっ！！！」

――――――――何回ツッコンでも終わらない。もうイヤ。

もう一人の先輩『副部長』いわく……

『昔は相当荒れていたからな。今の晴樹はエネルギーを向けるベクトルが変わっただけだいぶマシだ』

だそうだけど。

今のこれはこれで、荒れている人以上に存在してはいけないキャラではないかと思う。

「何を言う、貴様は溶ける。絶対にだ。だか紳士俺様は、溶けるところを見せると君が死んでしまうのは分かっているからな……あえてチビッ子のワガママに付き合ってやっているのだ。寛大な処置に感謝しろよ」

「あああぁぁぁ、もうっ！！　コイツが起きちゃうじゃないですか！！　静かにしてくださいよ！！！！！」

「いや、うるさいのは貴様だスノボール三等兵。見ろ――」

そう言われて斜め下に目を向ける。

「……あれ？　ここは……？　あ、雪乃か。それに……晴（ハル）先輩……」

あ、もう一匹の、響（バカ）も目が覚めたみたい。あれだけ騒いだし、当然かな……。

「おはよう御鏡ボーイ。今日も響（ヒビ）いてるかい？」
「おはようございます春先輩。ええ、頭がガンガン響いてます。どこかのミニチュアバイオレンスに、意識失うレベルのハイキックを散々喰らいまくったん――――――でぇっ！？」
「誰　が　ミニチュアバイオレンスよっ！！！」
気がついたらもう一回蹴っていた。でも今のはコイツのせいよね。
「マジレスするなら、スノー雪乃少尉のことじゃないかね？」
「スノーじゃありません！　蘇芳（すおう）ですっっ！！！」
「そうですよ先輩、失礼じゃないですか、雪は――――もっと儚くて、優しげなイメージの物ですよ。こんな物理攻撃力ＭＡＸのジョブ『格闘家』みたいな野蛮なもんじゃないでｓ――――――がぁっ！？」
「誰が格闘家よっっっ！！！！！」

ああ、イライラするっ！！

つい五分前の『何か』の感情はもう消えていた。

そう――――やっぱりコイツは……

最っっっ低よっ！！

◇◇

我輩は猫――――っぽいイメージの美少女――――のサンドバックにされている普通の高校生である。名前は御鏡　響。いつからこうなっていたのか皆目見当もつかないが、気がついてみれば何やら

ギャーギャーと鳴いていたことは覚えている――――蹴られてだけど。

結局俺を、しこたま蹴り蹴りしてくれた暴力――じゃなくて雪乃は、いつものごとく二本の尻尾（ツインテール）をふるふるしながら一言――

『お茶買ってくるっっ！！』

とか、なぜか自分からパシります宣言して、自分から言った割には頬を膨らませながら食堂へ向かっていった。

ちなみに食堂は地下なので、地味に階段がめんどくさい。だから怒ってるのかもな。そうすると自分から言い出したのが謎だが――――若いうちの苦労は、買ってでもしろ――――ってとこか？

ただ買うのはお茶とジュースだけど。

「して、晴先輩」

「なんだねミラーマン。俺はスカートじゃないから、どう反射させても見えるものはないぞ？」

さすがだ、この打てば響く感じ。あの時希望届に『帰宅部』と書いたのは間違いじゃない。人として間違っている可能性は否定できないが。

それでも俺はダルがりと同時に、こう、貴重な青春を全力で下らない会話に費やすような姿勢も嫌いじゃない。

なぜか、一人で寝てる時にはは失った気分になる――――『平和』が実感できるしな――ってそんなことよりも……

「今日の『活動』どうします？」

「ふむ、俺としてはこのまま『二人ワンマントークショー』というのも吝かではないが……」

どうだ？　と、先輩が目で寄越してくる。

「俺そういう発想大好きです」

どうやったら思いつくんだ？　そのタイトル。

「うむ！　やはり分かっているなミラーボール！！　では早速トークショーといくか！！」

そしてブレザーの胸ポケットからペンを出してマイクに見立て――開演。

「ハルキと！」
「ヒビキの！！」

「「二人ワンマントークショー！！！！！」」

新しいなコレ。しらんけど。

ハル「えー、このラジオは二人でワンマンに進めていく、愛と平和と真実を貫く番組でございます」
ヒビキ「どなた様も『忘れていた青春』を取り戻す勢いで――ご清聴下さいませ」
ハル「よし、まずはオタヨリのコーナーだ！　えー、まず一枚目――って今考えたから届いてないわボケッ！」
ヒビキ「程よい企画倒れ！　すばらしい！！　これぞ貴重な青春の浪費！！」
ハル「さて、次のコーナーは――――――――――」

「――――――――なぁ」

と、ハル氏から声がかかる。

「はい――――俺も何となくわかりますよ」
「じゃあせーの、で言おう。せーのっ――」

せーのっ――

「「飽きたんで止めよう（ましょう）！！」」

一瞬で飽きた。文にしたら五行くらいで終わるかもな。知らんけどね。
にしても、うん、やっぱり息ピッタリ。俺たちマジで親友として生きていける気がする。

「にしても、何か変化がほしいよな」
「そうっすね……。何か欲しいですよねー」
「言ったくらいで来れば苦労しないけどな！」
「そうですよねハハハ……」
なんだか、変化が起きる『予感』自体は在るのだが……。

などと、ちょっぴり『お約束』を期待したが、まあ、そんな事があるはずない――

――――――ガチャッ

――――と、考えた矢先に、この空気を壊すように開いたドアと――人の影。

『帰宅部』を巻き込んだ、運命的な出会いが起こる。

そう、或いは、それは必然だったのかもしれない――――――――

そして、入ってきた『彼女』は一言、こう、告げた。

「お茶買って来たわよ」

「「――――ってお前かよ！！！！！」」

シンクロナイズドツッコミング。さすが先輩です。期待してたことも俺と一緒か。

その後、茶を飲んで適度にダベり、適度に蹴られた俺たちは、そのまま帰路についた。

ちなみにマジメっ子な『副部長』は、今日は用事があったのかお休み。『顧問――あるいは俺と雪乃の担任――』も顔を出さなかった。本日の部活は最後まで三人編成だったわけだ。

実に、無意味な一日だった。でも平和ってすばらしい。

『帰宅部』の『変化』は、まだ遠い。

3．『帰宅部』の日常（後書き）

どうも、「休日中にやっちまえ！」とイキオイで連投の昭成です。

結局、唐突キャラ名出しまくるのも気が引けたので、『部長』だけ出しました。

肌に合わない人が多そうな……。でも、もし楽しんでくれる人が居たら嬉しいキャラだったりします。自分はこういうノリ好きなほうなので。

次回は、次の日にするか、夜にするかで悩んでます。どうしよう……。

では、ネガネガするのも良くないと思うのでこの辺りで失礼します。

あ、もし感想とかあれば大歓迎です。お待ちしてます（キリッ

4.　『ブログ部』へようこそ……あれ？（前書き）

帰宅部から帰宅……まぎらわしいな。

そして、ネットの世界へ――――

家に帰ってからの活動も『帰宅部』って部長が言ってた！（そりゃ名前的にそうだよね）

4．『ブログ部』へようこそ……あれ？

◇

結局、あのあと俺たちは、ダベるだけダベって帰宅してきた。

ああ、素晴らしきかな、人生の浪費。

実に無意味な一日であった……。

考えてみれば――いや考えるまでもなく、やはり無意味すぎる。

それもそうだ、朝は謎のストーカー女。昼まで花壇に刺さって気絶。そして部室で再気絶。そして帰宅し、今に至る。三分の二が気絶ってどうよ？　何かおかしくないか？

全く、これはひどい――と同時に、やはりどこかでこういう時間を求めている自分が居ることにも気付く。

これが青春なのか、平和なのか――平和というには、気絶したけどな。

◇

帰宅後、俺はさっそくＰＣの電源を入れる。と同時に、カップ麺にお湯を投入――

――――そして、立ち上がったＰＣでサイトを見る――――――頃に、丁度出来上がり。

パソコンが立ち上がって、湯気もたちあがる。どうよこの効率の良さ。趣深いだろ？

って違うか。

――――こんな俺にも、パソコン上にではあるが、至極真っ当（？）な趣味がある。

いわゆる『日記（ブログ）』ってやつだ。別に、現実の友人が居ないからとか、特につながりを求めてやってるってわけでは無い。

無いけど、何か『俺』というものを残しておく手段がほしい。そう思って始めた。

もちろん中身が――マジメに語った人生論から、すぐに下らない日常の内容へと――シフトしたのは言うまでもない。だってダルいし。

――とか考えつつ、立ち上げたネットの画面で、アドレスとパスを入れて……ＳＮＳって言うんだっけか？　ＳＮＳサイト『ブロング』へ、ログイン――――ちなみにパスもアドレスも、一回一回手入力だ。ブログ始めてすぐに『下手に入力情報残すと、色々乗っ取られる』なんてうわさも聞いたしね。用心に越したことはない。

『ブロング』というのは作ったやつからすればブログ＋ロングって事なんだろう、俺としては足が飾りのロボット的な物体が思い浮かぶけどね。

しかし、マヌケなサイト名の割に、そこそこに利用者が多かったりする。シェア的には――どうだか知らないけどな。

さて、今日もニュースやら何やらチェックしよう――って、お、新着メッセージが二件。

二件ってのは珍しいな……どうせ一件は雪乃だろうし。

『>>差出人名：ＳＮＯＷ<<　今日は……その、悪かったわね。でも……悪いのは全部……アンタなんだからね！　次に同じ事したら、承知しないからね！！』

二本のシッポをぴょこぴょこさせて――表情もころころ変えながら――キーを叩く様子が目に浮かぶ。

一件目は案の定雪乃さんでした。

――ってあれ？

内容を要約すると、『悪かったけど全部俺が悪い』の？　なにこれ？　論理展開が新しすぎませんか？

いや、もう一度良く考えよう。

アイツの性格を元にした正しい解釈は、こうか――――

『今日は……その、（アタシがアンタを蹴ったりして、アンタが）悪かったわね。でも、悪いのは全部――（ここからは一緒だな』

――――ってどんだけ悪魔！？　論理展開じゃねえよ。もう道徳的におかしいだろ！　なんとかしろサツども！

そして続く文章は――

『追伸、どうせアンタ寝るんだろうから、ムリに返信しなくていいわよ。』

おや、後ろは意外と普通でした。一安心。

――って、俺がもう寝ると思ってるのかよ……今はまだ午後六時半ほどですからね……まだ寝ませんよ。

この娘っ子は俺のことを幼稚園児とでも思ってるんだろうか。全く、人のことを子ども扱いしやがって……むしろ自分こそ幼稚園ってほどではなくとも、チビッ子のくせに――――

――――ヴヴヴッ

マナーモードの携帯がブルブル震えて着信を知らせる。
『新着メール：一件』
携帯にメールか。差出人は、どれどれ――――
『＞＞蘇芳雪乃＜＜　　ねえ、アンタ今失礼なこと考えなかった？
なんていうか……違ったらハズいけど、今、アンタがアタシのこと馬鹿にしたような気がするの。……まあ明日素直に言えば許してあげるから、教えなさい。あと明日はちゃんと授業出なさいよ。それじゃ。』

――――――――ブルブルブルブル
携帯の次は俺が震える番でした。いいホラーですねＨＡＨＡＨＡ。
ていうか、そんなことより。このピンポイント具合――――
――――大丈夫だよな？　次電話鳴ったら『今、アンタの後ろに居るの……』とか無いよな！？

……。よし、着信なし。念のため後ろも振り返るが、さすがに居ないようだ。

だが、ここに居ないという事は――――どうやら、アイツの第六感（？）は、少なくとも監視カメラか盗聴器と同レベルのようだ。
……こわっ。

――――とりあえず、アイツに軽くメッセージを返信しておく。なんだかんだで、返さないと次の日拗ねる。それでも放っておくと、しょんぼりとして、それより先は――――多分蹴られるんだろうな。試してない。
ちなみに返信の中身だが、勘違いで終わらせるために『素直に言う』なんてことはしない。まだ死に場所を見つける歳ではないし。

さて、気を取り直し、俺はもう一つの新着メッセージをチェック。差出人は――

『>>差出人名：ＫＹＯ<<　よう。最近更新無いが、生きてるのか？　たまには生きてるかどうか位書けよ。』

ＫＹＯさんは、俺のネット友達。一時期――俺が寝ている間見た、下らない『夢』を日記のネタにして更新していた頃――に、その夢が面白いとかって食いついてきた人だ。

その後何度かやりとりする間に盛り上がって、フレンド登録した流れだったりする。

口調はぶっきらぼうだけど、何となく優しいオーラを感じる。年は近そう。一個上くらいだろうか。

ちなみに、メッセージやら、日記のやり取りで盛り上がってるうちに、一度『是非ＫＹＯさんと会ってみたいですね』と伝えたときは『昼夜逆転慣れすぎて夜中以外は寝てっからムリ』との返事が来たので、二人オフ会は企画倒れということになった。

しかし、少なくとも俺とは気が合う人だということは間違いない。俺も夜は――象が踏んでも起きないくらい（謳い文句）――眠いから、いくら頑張っても日付が変わる辺りからは、全く起きられないし、相手が『起きられない』ってあたりも、良くわかる。なんだかスゴい親近感。

ちなみに、恥ずかしながら『ブロング』の友人はこの二人のみだ。来るものは拒まず。と、思ってるから、大体の日記は全体公開だけど――――今のところ、どうみても『出会い系』以外の申請は来ていない。

人望がないのか、日記がつまらないのか……後者だと思うことに

する。

＞＞ＫＹＯ＜＜さんは、先の『夢』の話で話しかけられて以来、純粋にネットの知り合いだ。

そして、雪乃の場合は、俺に『ブロング』を教えると同時に、自分のアカウントにアクセスし、勝手に登録申請⇒承認だけやって、フレンド＞＞ＳＮＯＷ＜＜を残していった。

蛇足だが、『そういや、お前ってスノーとか言われるの嫌いだったんじゃないのか？』って聞いたら蹴られた。『アタシはスノーじゃなくて蘇芳だって言ってるでしょ！』だってさ。

雪乃ガイドライン法では、三次元上で『スノー』と言うのがアウトらしい。なんでやねん。

などと振り返りながら作業を進めて（ＫＹＯさんに要求されたし）生存報告がてら、日記の更新終了。

内容は当然、今日の出来事を名前だけ伏せて日記にしたものだ。

つまり俺が第三者として見たなら……まず信じないような話になっている。とだけ言っておく。

一通りニュースやら、巡回してるサイトやらも見終わり、風呂にも入って……すべて終わった頃には、時間は午後の十一時。

さて、そろそろオネムの時間ですね。

画面見すぎて目も疲れたし、何よりも――――私めの睡眠欲が限界に達しております。

そんなわけで

お気に入りのウザちゃん（ツンデレ抱き枕、抱くと『うざっ――』って効果音が出る）を抱いて――――

今夜もオヤスミ。

4.　『ブログ部』へようこそ……あれ？（後書き）

読んでくださった方はありがとうございます！

早いもので、初書き小説から既に四話目……だと……？

休み中に、できる限りガーっとやってみた結果がこれだったりします。

そして文章の成長具合は……うん、後ろを考えてから書くから、セリフ回しやら描写やらが楽しめるのかどうか……自分だと全く分かりませんね（笑）

というわけで、御意見　御感想、誤字脱字（ドジっ子）の指摘などお待ちしています。

などとフザけつつ、今回はこの辺で。

5.　『ネット友達』の一日。（前書き）

ネット友達『キョウ』の一日。

『記憶』を探すも、早々に諦めネカフェとバイトでヒマ潰し。

でもそんな『お友達』は意外と近いところで繋がっていたようです。

5．『ネット友達』の一日。

昼間はちょっと……大きい以外は、あまりにも普通すぎる住宅街。その奥にちょっと……進学校という以外、これまた普通の私立高校。

そして住宅街の反対には――――少なくとも住宅街には不釣合いな位には――――それなりに大きな駅。

それが普段の都内西部のこれまた……ちょっとした大都市――――『斉川市』の姿。

しかし、今は深夜。静まり返った住宅街と、私立『斉川高校』。駅周辺は今もなお、変わらず盛り上がっている。

そんな、夜通し眠らない『斉川』

眠りこけた住宅街の反対側、灯りによって連日徹夜を強いられる駅前の景色。

そんな、光にまみれた繁華街――――もう一つの『太陽』に入っていく男が一人。

その名前は――――――――『キョウ』

◇◇

『店長の部屋』で目覚めた俺は、電車が止まっているのに『眠らない駅』――――夜の『斉川駅』へと向かう。

起き抜けに『うざっ』と、毎度のごとく何かフザけた幻聴も聞こえたが……寝起きだったためか、よく寝起きと同時に訪れる頭痛のせいなのか、よく覚えていない。

誰がウザいんだ、コラ。何寝起きの人間にケンカ腰なんだ。あ？

もし夢じゃなかったら言ったやつは――――探し出して……ミンチ確定だな。

さ、いつもの通り『記憶を探し』ますかね。

あれは、何年前だったか、それとも一年たってないのか、ある日気がついたら見知らぬ家で目覚めた俺は……夜の『斉川』をウロついていた。

ベタな話だが、記憶喪失だった。自分が誰か分からなかった。

どこにあったかも覚えていない家を飛び出した俺は、深夜でも明るい『駅』へ歩いていったわけだ。

家がどこだったか忘れた。マジで何も分かってなかったから、だいぶ錯乱してたしな。

辛うじて分かったのは――――唯一ポケットに入っていた中学生の学生証によると、どうやら俺は『キョウ』という名前らしいということだった。

まあ、そんな過去はどうでもいいな。

今日も俺は『自分の記憶探し』のために、夜の『斉川駅』へと来た。

何年続けても収穫がないが、少しは楽しんでいる。

そんな俺の行動パターンはこうだ。

日付が変わる頃に『部屋』で起床。

そこからネットカフェで『自分探し』やら娯楽やら。

その後に三時間『バイト』して――――

――――最後に、そのまま『店長』が貸してくれる部屋で就寝（誰かと共用らしいが、当然相方を見たことはない。寝てるしな）

――――――って、流れだ。

◇

日課の一つ『自分探し』――――ネットカフェで――――結論から言うが、何も分からなかった。

唯一のヒントだった学生証は――――『キョウ』の名前以外は擦り切れて見えず、ヒントにすらならないと思い――――初日に捨てた。

記憶が無くてムシャクシャしてやった。後悔は若干だがしている。あのときの俺……もし会えたら絶っ対ーミンチだ。会えないがな。

とにかく、情報なぞ得られる要素がない今は、『自分探し』――――と称してネットカフェで時間を潰しているだけだ。

さて、恥ずかしい自己紹介だが、俺には友達がいない。記憶喪失のご身分じゃ何もイラネーけどな。

一応会った事のない『友達』ならいる。ソイツに今から『会う』わけだ。

ちなみに、『友達』になった理由は、俺が見た『夢』とよく似た日記をつけてやがったアイツに親近感が沸いたからだった。

世の中には自分に似た人間が3人いるとか言うが、少なくとも『夢』でなら似てるってやつを1人発見した。

――――――『ブロング』へアクセス。アドレス、パスと入れて、起動だ。

どれどれ……っと！　更新していやがる。最近更新無かったが、どうやら一応生きていたらしいな。

唯一のフレンド登録ユーザー>>ＨＩＢＩＫＩ<<の日記へ。

◇

『友人の催促につき更新（笑）』

（笑）じゃねーよ……。時間の都合で会えないが、もし会ったらミンチにすんぞ、コラ。

『全く……今日は散々だった。ストーカー女に追い回されるわ、幼馴染に蹴られるわ……ＳＮＯＷさん聞いてます？　アナタの蹴りが一人の善人の脳細胞をマグニチュード９９．９で揺すったんですよ？』

＞＞ＳＮＯＷ＜＜……ああ、なんかアイツのリスト入ってたな。つか、フレンド二人とは＞＞ＨＩＢＩＫＩ＜＜も中々寂しいやつだな。俺が言えた義理じゃねーけど、一人は昼夜逆転でもう一人は暴力女……不幸なヤツだ、見ている分には面白いが。

『そして、その後、また蹴られた俺は――――花壇に刺さってました。』

ククッ――――――コイツマジで面白え。ここがネカフェじゃなけりゃ盛大に笑ってるところだ。

普通の人間が花壇に刺さるか？　マジでコイツを一回見てみたいもんだな。つか、今度ムリヤリ徹夜させて俺の目の前で花壇に刺さってもらいてえ……。貴重な人材（バカ）だぜ……！

『そして、その後は部活に出て――――また蹴られて気絶しました。めでたしめでたし。では今日はここらで。……あと＞＞ＳＮＯＷ＜＜はもう俺を蹴るんじゃないぞ。俺はそういうマゾヒスティックな趣味はないからな。』

ク……ククッ……！　――――――腹イテぇわ……！　まさかの暴力で天丼――――同じネタを重ねてやがった――――ドＭ通り越して新たな何かに変わるんじゃねえのか、コイツは。

＞＞ドＳ（ＳＮＯＷ）＜＜と一＞＞ドＭ（ＨＩＢＩＫＩ）＜＜でしっかり需要と供給がかみ合って、毎度毎度お楽しみってわけだ。ずいぶん前衛的な地産地消だなおい。

しかし、相変わらずバカ全開な『友人』の無事も分かって一安心。
時間は――午前一時。
――――さ、『バイト』へ向かいますか。

◇

『斉川駅』の繁華街をさっきのネカフェから住宅側に少々歩いて五分ほどかかる距離。
そこにある、名前から分かるこじんまりとしたラーメンとお酒の店――――『麺ＢＡＲ』の店内へ。
毎度思うことだが、もう少しヒネった名前にしろよ……オッサン。

「おはようございまっす」
「おお、キョウじゃねえか。おはよう。で、キョウ君。いやキョウちゃん、今日（キョウ）は一体どうしたのかな～？」
「（……チッ）バイトっすよ。知ってるじゃないっすか。……でも、ま、いつも世話んなってますからね。あと――――今日もサムいっす。」
この第一声がとても残念なオッサン――――　宇治原　栄一郎（えいいちろう）が、軽妙（文字通り軽く妙）かつサムい挨拶をかましてきやがった。恩が無ければ、まず間違いなくミンチ――だ。
しかし、どっかで見たことあるよなオッサンだよな……宴会の席とかか？　こういうサムいの連発するオッサンいるよな。しかもシモネタ大好きな。
「む？　そうか？　四月なのに寒いのか？　……特に空調は問題ないようだが？」
「ギャグがサムいっす」

「そうか。それなら……私が温めてあげるわっ！！」
ギリッ――――
「いっ――――ギブギブギブ。絞まってんぞ！」
オッサンの裏声で『温めてあげるっ』ってキモッ――――と思ったらヘッドロック。笑いを『殺(と)り』にきやがった。そうまでして笑わせたいのか、このクソジジイっ！
メチャ絞まってるし、二重の意味で笑えねえっての。ハンパな抵抗ではビクともしねえ。何モンだよこのオッサンは。
まあ本気でやれば、ある程度はいけそうだが……少なくともこのオッサンは俺より遥かに強(つえ)ぇ事は分かる。
俺のほうも、記憶を失う前に鍛えていたのか荒れてたのか……それなりには強いと思う。五人までなら何とかなる……たぶんな。
つっても、本格的なケンカなんぞ一度ガキ襲ってやがった不良共にかまして以来、久しくしてないし。
――――って俺は今絞まってるんだよっ！
「ええい、俺はそっちのケは無(ね)えっ。いい加減離せ――――」

カラン――――――――――――
ほらみろ、救いのロープ（客だが）が来たぞ。ブレイクだ。さっさと離せっ！

「いらっしゃいま……おお、美菜(みな)ちゃんか。すまねぇなあ、ウチの晴樹(バカ)が呼んだみたいで」　オヤジのその声の先には、後ろで一つに纏めた漆黒の長髪、それに合わせて作られたかのような黒い瞳。華奢に見えながらも、しっかりとした体の線と、女性にしては高い身長……あとは、長い竹刀……を持つ。全部嘘じゃないぜ。当然竹刀もだ。
「いえ、一家≪うち≫は最近親が受験受験と五月蝿いもので……あまり『帰宅部』に行ってませんでしたから……このくらいは」
そう、美菜さんは、一栄一郎≪オッサン≫の息子の晴樹さんと同

じく住宅街の方にある高校に通いながら――――『帰宅部』とかいうところに所属してるという。そういや>>HIBIKI<<もそんなこと言ってたような。

ま、今はいいか。

――――この、美菜さん……宇佐美（うさみ）　美菜（みな）。見た感じ晴樹さんの親友（？）らしい。ちなみに間違って――

「間違って『晴樹さんの恋人』なんていった日には――――」

「貴様ッ！！　晴樹とは違うと言っているだろうっ！！！」

「いでっ……！」

心の声が漏れた俺に、バシッ――――と、ツッコミが入る。当然竹刀で。いい―虐待≪スイング≫してる――――つまり、ぶっちゃけそれくらい強い人ってことだ。

てか、この人は『和風』なイメージのものなら大体達人級だ。書道茶道に華道に……剣道、柔道合気道などなど……とにかく『和風』なら何でもできるらしい。

特に格闘能力は、全力の俺と同じかそれよりも少し――――と、そんな話じゃねーな。

「ッ――――美菜さん。勘弁してくださいよ……『小手』だいぶ痛いです」

「ふん。今のは、お前が悪いんだ。私と晴樹は別に……その……まだ……恋……な……」

いつもなら、凛とした印象の美菜さんだが、ずいぶんアガっているようだ。後半は何も聞こえなかった。

「？　何なんすか？」

「う……う、うるさいっ！　と、とにかくあの晴樹（バカ）とは何も無い！いいな！？」

うおっ！？　片手に竹刀付きの和風トマト様に凄まれた。ケンカは良くないと思うぜ？　俺に当たっても何も生まれねえっての。

「おい、美菜ちゃん。もうその辺にしないと明日キツいんじゃないか？」

ジジイが俺に助け舟を出した。いや、単純に美菜さんが心配なだけか。
「あ、言われてみれば――――そ、そうですね。それでは、お邪魔しました。おやすみなさい……キョウもな。」
「「おやすみ（なさい）、美菜ちゃん（さん）」」
そう言ってこれまた綺麗なお辞儀をして店を出る完璧大和撫子（※仕様が異なる場合がございます）美菜さん。
送るでもなく見送る俺とオッサン。

店内スタッフ（一名）がアホすぎて忘れられがちだが、夜の『斉川』は、それなりに危険だ。
ヤンキー崩れから、本物（マジモン）の人まで、よりどりみどり。女の子が襲われるなんて話もたまには耳にするし――――原産地からからコッソリ直輸入した『小麦粉』も出回ってるって話もあるらしい。
夜の『斉川』はそんな――『裏の顔』を持つ町だから……

だから初めのうちは、こんな深夜に一人で女の子を……と心配もしていたわけだが――――
『すいません。今、帰っていたらこの男が襲い掛かってきたので少し……迎撃を。気絶してますので、意識が戻るまでは適当に介抱してやってもらえませんか？　その後は適当に捨てておいてもらって構いませんので。』
――――『男とはいえ、こんな時間に気絶したまま寝ているとさすがに危ないので……』などと言う美菜さん

俺やオッサンと……美菜さんで、こんなやり取りが二回、三回……五……と増えていくたびに、俺たちの懸念――『夜道で女の子の一人歩きは危ない』――――が消えていった。

カランとドアを開けた鈴の音が聞こえた――――――――

「失礼しま……ああ、キョウか、すまない。今帰っていたら、いきなりこの男が――――」
――――ほら、な？　心配ない。

◇

それからは平穏無事に（下らない行動とギャグを除き）勤務終了間際の午前四時前。

長いようで短いような三時間が終了する。今日も客はいつも通り――――まあ、チラチラ来る。しかしこの時間は、明日（って今日か）日付が変わる前の、夜の飲み会ラッシュに向けた仕込みの手伝いが中心だった。

「――――それじゃ、そろそろ上がって良いぞ。キョウ。気をつけて帰れよ」

「はい、それじゃ、お疲れっした！」

挨拶を済ませて、帰るか――っと、そうだ。

「そういえば、何で美菜さん来てたんすか？」

最近見かけなかったので聞いてみる。毎日来ているわけではないが、週に一回くらいは着ていたしな。

「ああ、なんか大学進学がどうたら……らしいな。晴樹はまだ気にしてないみたいだが」

大学か。……通ってみたい気がする。

って、そういや俺って――――――――今何歳なんだろうな？

マジで何も分かんねぇ……。

誰か『相談相手』とか居ねえのかよ。

オッサンにはこれ以上負担はかけたくない。晴樹さんは三年、邪魔はしたくない。美菜さんも同じく。

あとは――――誰かホントの『友達』できねえもんかな……。

◇

記憶も何も無い俺に、『バイト先』と一緒にオッサンが提供してくれたものは『寝床＋給料』という、記憶喪失で何も分からない俺にとっては破格の待遇だった。

情報が『キョウ』だけじゃ部屋も貸してくれないしな。

この部屋は、オッサンからはルームメイトと共同だって聞いたんだが……まだ会ってない。昼は寝てるし……帰ってきても、起こすのは悪いと思って、灯りも点けずにすぐ寝ちまうしな。

意外と孤独な俺の『友達』候補の一人として考えてる。

全く知らない人とのルームシェアリングみたいな契約なのか、オッサンも『どんなやつかは、よく分からん』とか言ってたしな。下手すると夜逃げでもして帰ってきてないのかもしれん。巻き込まれないことを祈る。

――――いい加減眠たい俺は、『家』があることに感謝しつつ、軽くシャワーだけ浴びて今日も就寝。現在朝の四時半。

そういや、『あの日』――――記憶喪失した日にオッサンに会わなければ……どうなってたんだろうな。

ちなみに、オッサン――――表面こそ、あんなオッサンだが――――

実は俺に対して要求した事は『店で三時間程バイト（適当で良いとすら言われた）』だけだ。

あとは『記憶が戻ったらバイト辞める前に必ず教えろ。挨拶くらいはしていけよ』だそうだ。

――――――正直、ここまでして貰うと、ありがたいと同時に申し訳ないと思う。

だから『部屋』に私物は全く置かない事にした。散らかしたら悪い。相手とモメたら、オッサンに迷惑かかるだろうしな。
着替えもデカいカバンに入れて持ち歩くし、洗濯はコインランドリーだ。
オッサンには何も言ってないため、この『超遠慮生活』はバレてないが、一度だけ部屋を見せろと押しかけてきた晴樹さんにはバッチリ見られて――――
――――俺の『孤独で質素な生活スタイル』が気に入らなかったらしく……
『半分は自分の部屋なんだから、顔も知らないルームメイトに遠慮なんかしないで使っちまえって。どうせ朝帰りどころか朝にすら帰ってこないクソビッチだかエロザルだかに決まってんだからさぁ』
などと言われたりしたが、結局変えてない。

もし記憶が戻ったら、その時は本当の家に帰る――――いつかはこの部屋を出るわけだしな。
いつ『記憶』が戻るか分からないから、後は濁さないようにしてるわけだ。
そんな生活を一年以上続けているわけだが……早く記憶戻れよ……俺の脳は……。

さ、今日も眠いし……そろそろ寝るか。

じゃあ、な。

5.　『ネット友達』の一日。（後書き）

うーん。
リアル（学校）のおかげで5話は時間かかっちゃったなぁ。
上手いこと書けないな……と思いつつ、何とか五話でございます。
読んでくれた方はありがとうございます！

さて今回は、ちょっとマジメ回になりました（なっ……た……？）
でも、書いたら結局思ったよりもシリシリアスアス（シモネタみたいだな）できなかった。
それでもムリに書いたらまあ……シリアス描写ができる作者さんスゲーな！　と思った次第。

小説ビギナーの俺に隙は無かった（毎度の言い訳）

一話から少しは成長しているのだろうか……ってこんな短時間じゃムリか。

ご意見ご感想ご要望、お待ちしてますっ。

次回は、またバカな主人公に戻ると思います。

待ってくれてる人が居たら、もうちょっと待っててください。

6．　新入生、歓迎します。（前書き）

緊急放送で呼び出された俺たちが行う今日の部活動は……

ずばり『新入生歓迎会の計画』だ。

……残念な気配しかしねえ……。

6. 新入生、歓迎します。

四月も終わりに差し掛かリ――――
新入生も、ようやく勝手が分かってきたのかずいぶんと調子に乗り出してきた。

今日も今日とて、だらけた放課後の空気がそうさせるのだろう。毎日変わらない状態だらけだ。
話し声に笑い声、運動部の掛け声に、廊下の壁際に座って駄弁る生徒……などなど。
止まない騒音と代わり映えの無い光景に鼓膜と網膜の組織を浪費させつつ……軽くジョギングしながら三年の教室を通り過ぎていき部室へと向かう。
そもそもの原因は、授業終了後にいきなり入った放送だ。

『重大な議題がある。各人、放課後は、疾(はや)きこと赤兎馬の如く……至急部室まで来るように。来なかった者はルフトハンザの国際便でアウシュビッツ送り確定だ。覚悟しておけ』

――――だそうだ。
全く所属も名前も言っていないのに、誰が言ったか一発で分かってしまう放送を聞いた。なんて事は……間違いなく『帰宅部』に入ってから体験した。自信を持って言い切れる。
つか、放送ジャックして『部活に来い』って、相変わらず全力で無駄な人生送ってる人だな。
俺もそういう背徳感（？）は好きだが。

◇◇

「よし、皆のものきちんと集まったな。幸運にも国際便の予約は要らないようだ。では、これより緊急会議を行う」
部室内に、一見ヤサ男――――なのだが無駄な威圧感がある――――『部長』宇治原　晴樹の声が響く。
「今日の議題は……ズバリ『新入生歓迎会』をどうするかだ！！皆が知っているように本日より『入部届』の受付が開始される」
あ、そういえば今日から受付か。
でもまあ『ウチ』には関係ないだろ。おそらく全部活中ブッチギリトップの、残念な活動内容だしな。
「それにあたり新入生をどう手厚く迎えてやるのか――――貴様等下賤な一般庶民らしい、賤民思想にまみれた忌憚なき浅知恵を上納しろ。以上だ、何か質問はあるか？」
……なるほど、『歓迎会をどうするか』ね。
言葉選びから話の中核まで、バラエティ豊かにツッコミどころを用意してあるな。
どこかしらでも拾ってもらう展開を期待しているのだろう。……せっかくなので乗りましょうかね。
「「すまない（すいません）晴樹（晴先輩）、ひとつ質問してもいいか（ですか）？」」
だが質問しようとした俺に、ダブった声が一つ。どうやら『副部長』が何か言いたいようだ。
「おいおいなんだね君たち。俺は聖徳太子じゃないぞ？　そうだな……よし、宇佐美　美菜。その方から述べるがよい」
言ってのける晴先輩は、今日は尊大なキャラで通すのだろうか？
対して、美菜先輩のハッキリとした声が通る。
「お前は……お前は、どうしてそんなに馬鹿なんだ？」
凛とした表情と声で――――質問といいつつ、当然のように文句を言ってのけた。それも実に辛辣な。

ついでに言うなら、今の美菜先輩の全身からは――――彼女の漆黒の髪よりさらに真っ黒いオーラ（的なもの）が見える。
「はい、美菜君の意見は却下。次、御鏡官房長官、発言したまえ」
しかも平然と流しやがった。つか、今の美菜先輩の発言は意見……なのか？
さすが幼馴染（と聞いた）だな。あの威圧感にも、完全に耐性が付いているようだ。
一方、強烈なカウンターをしたつもりがあっさり避けられて――――
『……っ！』と、声こそ出さないものの、ギロっと睨みをきかせて明確な抗議の意思を示す美菜先輩。
既に『帰宅部』に入って半年。俺も知り合ってそこそこ長いから、美菜先輩の考えていることはある程度なら分かる。
たぶん俺と雪乃――――後輩の手前『すぐにギャアギャアわめいてしまっては情けない』とでも思っているんだろう。どこかの瞬間湯沸かし器とは違って……大人だ。
などと考えていると、今まで沈黙を貫いていた雪乃が突然こちらに視線を寄越してきた。
「……何よ？」
「イエイエ、ナンデモアリマセンヨ？」
「……あっそ」
……危なかった。勘の鋭いヤツめ……他の事に活かせよな。
って、そんなことより晴先輩に意見言わなくちゃな。
「晴先輩、歓迎会もいいですけど、その前に……そもそも部員来るんすか？」
「シャラップ！！　いいか貴様。未来なぞ誰にも分からん！　俺にも、お前にも、そしてまだ見ぬ誰かにも！！　来る前から来ないことを考えるなっ！！　恐れる必要などどこにもないっ！！」
それでもまだ言い足りないのか、さらに部長は言葉を足す。
「全く……取らぬ狸の――というだろう？　そんなことすら知らん

とは、貴様は小学生か！」
結局、津波のごとく暴力的な勢いと質量で押し寄せた言の葉。
だが、その本質は多分――――ただ『突っ込んで下さい』と、語っているだけだろう。そんな気がする。
「いや先輩、その諺は逆のニュアンスですっ！　言った傍から自分で全否定ですか！？」
というわけで、手近なところから突っ込んであげる。ノリって大事だもんね。
「いちいち口答えするんじゃありませんっ！！！　まったく嘆かわしい……」
（えぇぇ、せっかく突っ込んであげたのに結局怒られたんですけど。……おい雪乃、何とかしてくれよ。俺じゃムリ。ノリは好きだが手に負えん）
（アタシにできるわけ無いでしょっ！　アンタねえ……っ！！）
そろそろ会話の仲間に入れてあげるべく、呆然としている雪乃にアイコンタクト。
視線のニュアンスから、大まかな意味は分かるので、しっかり『意訳』してやれば、何気に普通の会話に近いコミュニケーションも可能だ。便利だろ？
（いや、マジで頼む。美菜先輩に、俺――――ときて全然ダメなんだ。とりあえず行くだけ頼むって！）
（……分かったわよ。ったく、しょうがないわね――――）
と、俺は雪乃の援護射撃を発動させにかかる。
「おい、そこのイチャついてる雪ジルシ！！　キサマは何か無いのか！？」
「い、イチャついてませんっ！！！！（ガッ――――）変なこと言わないで下さいっ！！」
しかしうまくきまらなかった。
雪乃は『イチャつく』だの『恋人』だの、甘酸っぱいニュアンス

の単語を並べると、なぜか過剰に反応するのである。
その反応の大きさといったら……風呂に水ためてナトリウムの塊でも放り込んでみるといいかもしれない。それが雪乃（コイツ）だから。

「――――んがっ！？」
しかし、毎度の過剰反応までは分かっているのだが、何で先輩が言っても俺が殴られるんだ？
あとワンクッションでいいから、思考に段階を用意してほしい。
そうすれば、少なくともこんな悲惨な結末にはならないはずだから。
「冗談だよ雪乃クン」
「え……？　べ、べ、別にそれくらい……わ、分かってましたよ！？　分かってましたからっ！！」
はいはい俺も分かってますよ。アナタが分かってなかったことくらい。
語るに落ちたな。ったく……勢いだけで殴りやがって。
「いやー。悪いね。君たちのコントが面白くてついつい……」
この人には、その『面白さ』で殺されそうな被害者の気持ちなど永遠に分からないだろう。
「『つい』じゃありませんっ！　……そういうの、やめてもらえませんか？」
若干燻っているが、火がついた雪乃も少しは落ち着いたらしい。煙のようにゆらゆらと立ち昇っていたツインテールも、怒気の下がり具合同様に、だんだん下りてきた。

長年のカンで判断できる。もうちょっと待てば、この大火事も鎮火に向かうだろう。その後で再度俺は話を戻そうと思う。
なぜ、今すぐ話を切り出さないかといえば……火消しって知ってるだろ？
要するに――――燃えるものが無くなってしまえば、自然と火は

消える。
ビバ自由放任主義。単純かつ画期的な消火法だ。
しばらくして、本格的に落ち着いてきた辺りで先輩が一言。
「――――――で、雪乃クン。結納はいつなんだい？」
「ゆ、ゆゆゆ結納っ！？（バキッ）」
「ちょ――――――ぐふッ！？」
あれぇ……画期的な消火法……だったんだけどなぁ……。
そう、単純なことを忘れてたよ――――
――――火の隣が油田でした。
頼む、助けてくれっ！　このまま火消し理論で鎮火を待つだけじゃ、永遠に俺の危機が終わらないっ……！
「せ、先輩っ！　お願いだから火に油注がないで下さいっ！　そういう方向性のイタズラだけは止めてくださいっ！」
「フフフ、面白いことを言うなぁ？　ミラーボーイ。こんな面白いこと、そうそう俺が放り出すわけ無いだろ？　この一連の『お約束』の流れ――――名づけて『全自動死亡フラグ立て機』実に面白い」
そうですねＨＡＨＡＨＡ……全く面白くねえっ！！　と、心の中でノリツッコミ。
ふざけんなっ、このままいくとマジで油田から永遠に燃料が供給されやがる。
火消しがムリなら現代的な手法で消火だっ……！
すなわち――――頼むぞっ！　火消し改め消防隊っ！！
「おい、晴樹」
この騒ぎの真っ最中でもよく通るキリっとした声。その余韻だけで凄さが分かる。
祈りが通じたみたいだ。神様仏様、そしてありがとう稲尾様。
「い　い　加　減　に　シ　ロ」
「ぐっ……分かったよ、悪かった」

さすが我が部の『１１０番プラス１１９番』だ。一瞬で静まった。
ちなみに、もしこの段階で素直に言うことを聞かなければ美菜先輩が直々に、竹刀による『物理的消火』が行われるため晴先輩も抵抗できない。
一瞬でカタがついた。実に優秀なクローザーですね。
……それにしても聞きわけが良すぎるあたり、本人も実はそろそろやめようと思ってたのかもしれない。
「で、晴樹センパイは、結局どうしたいんですか？」
「うむ、横道にそれたが本題に戻そう。要するに、ただ新入生歓迎会が開きたいんだ」
「そうですか……って、いやだからまだ新入部員来てないんですって。迎えてないのに歓迎会開こうって言うんですか？」
「む……」
「てか、仮に部員を迎えたとして、初日から真っ先にこんなところ来るやつは……色々と、ダメすぎるでしょう」
初日にやる気見せてこんなところまで来るくらいなら、真っ先に帰宅してろって話だろ。
つか、そんなにやる気があるんなら帰れ。ここは『帰宅部』だ。
「うぐっ……イタイところを突くな君は……仕方ない。歓迎会はヤメだ。……して諸君、それなら今日は何をする？」
「うーん……」
「んー……」
「うぅむ……」
部長の一声に三者三様考え始める。
持ち込んだゲームは飽きたし、囲碁も将棋も美菜さんが強すぎるし、スポーツって気分じゃないし……ホントやることないんだな、俺らの部。
「――――あっ、そうだ」
思考レースの第一位は雪乃さんでした。ぴこーんと電球が光った

……ような気がする。ついでに頭についてる二本のアンテナもぴこーんと反応している。実に不思議な現象だ。
そして、彼女は一言告げた。
「もう結構いい時間なので……帰りませんか？」
そんなマイナス精神あふれる提案に、皆様の意見は――――
「「「……そうだな」」」
そうだ。だって『帰宅部』だもんな。帰ってナンボの部活だもんな。
『帰宅部』は今日も平和です。

◇

そして、いつも通り帰宅して就寝。
そしてこれまたいつもの通り、着替え入れ用のカバンからパジャマを引っ張り出して――――
そしてウザちゃん抱いて――――
今夜も……おやすみ。

◇◇

時計を見ると……結構遅い時間。もうそろそろ寝ようかな？

というわけで、今日も私は『日課』を行うことにしました。

『四月★日　晴れ』

『今日は、とうとう入部届の受付が始まりました。』

『もちろん持って行くところは決まっていたけど……緊張していた私は、紙を片手に長いこと迷ってた。』

『ようやく決心がついて、提出しに行ったら……なんと、今度は部室が閉まってました……。』

『また、再度アタックしようと思います。なんてったって女は度胸……ってホントなのかな？』

うん、また頑張ろう。むしろ頑張れ私。

ほんの少し気合を入れて……おやすみなさい。

6．　新入生、歓迎します。（後書き）

はい、先に謝っておきます。すみません。

普通に会話させてたら終わっちゃいました。てへっ。

場合によっては飛ばしてもいいのかもしれない……けど、せっかくなので書いてみた次第。

というわけで、ご意見ご感想、ご指摘お待ちしてますっ！

次回は……またキョウの登場かなあ……。

更新予定は……書ける時間がどれだけ取れるかによりけり……。

それでは、今回はこの辺りで。

7.　『裏』の顔（前書き）

夜に目覚めたキョウ。
恒例の『記憶探し』――――と称したヒマ潰しと化している日課――――を行う。
そして、バイト先では、ある人物と久々に話をすることに。
誰にでもあるのだろうか？　……裏ってものは。

7. 『裏』の顔

恒例の『うざっ』という幻聴で目を覚ます。
以前は思い出すだけでイラッときていたが、最近はどうでもいい。
うざいと言われるのは若干うざいが。

時間は丁度、夜の十二時を過ぎたあたり。
丑三つ時……には少々早いが、昼間全部使って寝てる分……スッキリ目覚めた。
今日も『記憶探し』開始だ。

◇

まずいつも通り、ネットカフェで時間潰し――――今日も『＞＞ＨＩＢＩＫＩ＜＜』のブログをチェックした。
『部活』の話が少々載っていた。『メンバー紹介』で終わってたから、結局五分も潰せなかったが。
元々不定期かつ適当な更新の日記だったから、別に、内容が短いのをどうしろというわけではない。
しかし、せっかくの『唯一の友人の日記』がヒマ潰しの材料にすらならず、少し残念だった。

そして、結局ニュースだ何だと見ているうちに一時間ほど時間が過ぎて……『バイト』の時間が来た。

◇

今日も俺は――――ヒネろうという気配すらない名前の店――――『麺ＢＡＲ』へと入る。
「おざっす」
さして大きくもない店の意外と重いドアを開け、その後で投げやり気味な挨拶をひとつ。
『別に挨拶だの口調だのは畏まらなくていい。どうせこの時間は準備中心で客なんぞ大して居ないしな』と店長が言っていたし、何となく『畏まった』態度が取りたくない俺としては助かっている。
「む？　おお、キョウじゃないか。いいところに来た！　今、丁度話をしていたんだが……是非お前にも聞きたい事があるんだ」
中々ガタイのいい『オッサン』が、図体の割には気さくな態度と声で挨拶に反応してきた。ついでに、何やら聞きたいらしいので、挨拶もそこそこに話を続けてもらう。
「何すか？」
「うむ、実は今こちらのお客さんと話していた事なんだが……」
そう言って、もうすっかり『出来上がってる』お客さんを指差すオッサン。
つまり『聞きたいこと』ってのは――――
「……『既成事実』を『未遂』まで戻すためには、どうしたらいいものかという話になってな。完全に『できちゃってた』ら、どうやって切り抜けるのかについて、マニュアルを練っていたわけだ！」
――――やっぱりな。ヨッパライとセクハラオヤジの話なんてそんなもんだ。実に残念な中年だな、おい。
改めて、ずいぶん血迷ったことを話し合っていたらしい二人に目を向けてみれば、カウンター越しに真っ赤な顔をした仕事帰りらしいサラリーマンと、『オッサン』――――店主の、宇治原　栄一郎が向かい合っている。

……酔ったオッサン共を見れば分かるように、ここ『麺ＢＡＲ』は、オッサンいわく『ラーメンと酒の店』だそうだ。店の名前が頭をよぎるたびに、もう少し位ヒネっとけと思う。
で、そんな……中年のオッサンが切り盛りする、散々ハシゴした挙句〆に来るような飲み屋で客が求めるトークといえば――――
「ちなみに、今のところの有力説は『男のステキなサムシングに……>>刺さった対象に超時空振動を起こす程度の能力<<を付与』説だ」
――――このように、少々『下品（かつ残念）な話』という場合も多い。
酒が入るからなのか時間帯なのか、それとも両方なのかは分からないが。
分からないが、とにかく、下品な話に巻き込まれるとウザったいので俺はツッコミだけ渡して逃げることにした。
「マジで練んなくていいんすよ！　つか、下品なファンタジーは止めて下さいよ。マジでクレーム来ますよ？」
「えぇぇ！？　ちょっとお客さん、あんなこと言われてますよ。もしかしてクレーム出しちゃいます！？」
そう言って、客に『お伺い』をたてるオッサン。
「全くっ！　問題！　ありまっせーん！！」
そして応えるのは、名前も知らない中年サラリーマン。コイツらの行く末が心配だ。
「……とにかく、知らないっす。そもそも子供なんて作ったことないし」
呆れた俺は、適当にあしらってこの場から抜けてやることにした。
「え？　ってことは何？　その見た目なら高校三年生のナリで、キョウ君まだ『ドーテー』なの？　うわ恥ずかしっ！　ヤラハタ一直線っ！？」
……スパっと会話を切るつもりが、えらく喰い付かれてしまった。
そしてそのまま、客――――オッサンに聞いたら田中さんとか言

うらしい――――と一緒に『どーてー！　どーてー！』コールで盛り上がるオッサン。

すっかりエキサイトしている二人に延々とシモネタで囃し立てられ続け……さすがに、客と、世話になってる『店長』でもムカついてきた。つかオッサンに至っては、シラフなのに煽ってんだろ。

このイライラ具合……もし刑法が存在しなければ、既に、冷蔵庫でキンキンに冷やしたビールの大瓶（６３３ｍｌ）二本を使って、頭のあたりを叩き割っていただろう。

「違っ……違いますっての！　『子供なんて作ってない』だけですって！」

まあ、法治国家で人様の頭を叩き割れるわけがないので、ここは健全な青少年らしく言葉で否定――――

「えー、やっぱ『子供作ったことない』んじゃん。どーてーキョウ君はさぁ！」

「日本語って難しいよねぇっ！　ヒャッヒャッヒャ！！」

――――否定しにいったが、この二匹の珍獣の前ではまるでダメだった。

酒に酔ったおっさんと、シラフの時点で既に酔ってるオッサン……この組み合わせじゃどうにもならねぇ。

もはや手に負えない――――諦観の領域に達した俺は……ひとり、ラーメンの仕込みに向かう事にした。

酒ばかりで忘れられがちだが、『ラーメンの店』らしく、スープは常に火にかけてある。時折かき混ぜるくらいはしておかないといけない。

詳しい材料やら工程なんかはオッサンしか知らないから、どこまでやる必要があるのかは不明だが、今の俺に細かいことは……どうでもいい。

とにかく、これで逃げられる。
チェリー認定されたが……どっちにしろ『記憶にございません』だ。どうにでもなれ。

◇

「よお」
厨房の奥へ向かうと、あまり一対一では会いたくない男が『一人で』居た。
「晴樹さん……こんな時間に、どうしたんすか？」
「何、暇だったからジュースでもと思ってな……。しかし『こんな時間』に来るお前に、『どうした？』とは言われたくないな。いい加減昼間に起きる練習しろよ。……それとも、まだ昼間は現実逃避してますってか？」
俺より少々背が高い、中々威圧感のある男から、これまたちょっと威圧感のある声が響く。どちらかというと華奢なイメージの俺と違い、ガタイの良さは父親譲りなのかもな。
『宇治原　晴樹』さんは、苗字の通りオッサンの息子さんだ。
しかし、現実逃避だの昼間に起きろだの……出会い頭にかける言葉か？
「いや、逃避じゃなくて普通に寝てるんですって。んなヒキコモリみたいな事しないっすよ。眠いだけです」
「……そうかよ。んで、いつ戦る気になってくれるんだ？」
冷めた声でずいぶんと物騒なことを言い出す晴樹さん。
一瞬で空気が凍った気がした。
少し離れたところではオッサン達がまだ盛り上がってる声が響くだけに……あまり現実味が沸かない。

毎度の事ながら、いい気分はしない。

いつだったか――――俺が、中学生らしき『ガキ』を助けたところを見られて以来、恒例のイベントである。

『一遍マジで戦おうぜ？』とか『いいかげん戦らないか？』とか、二人っきりで顔を合わせると……だいたい狂った要求をしてくる。

もちろん俺は、ケンカに明け暮れる気なんぞないから、是非とも他所でやってもらいたいが。

で、こんな晴樹さんだが、しかし、『晴樹とは……ただの……幼馴染だ』という『美菜さん』によると――――

『昼間のアイツは果てしなくバカだ。お前が知っている姿からは、おそらく想像もつかんだろうが』

『私にも気付かれていないと思っているようで、二人っきりの時も相変わらずバカな態度を取り続けているが……夜はずいぶん暴れているという情報もあってな……あいつには内緒で探ってみているところだ』

『何が理由で暴れているのか、目的も何も分かっていない。……昼と夜と、どっちが本物の晴樹なのかも……』

『……とりあえず、この件は晴樹には秘密にしておいてくれよ？』

――――らしい。

正直美菜さんの言うとおり想像もつかないが、昼間は『バカなんて言葉じゃ表現が足りてない』キャラだそうだ。

そうすると、何か？

やっぱ晴樹さんって……一種の多重人格みたいなもんなのか？

あの暴力賛成キャラが昼はバカ……あまりにも対照的すぎて、不気味だ。

「？　キョウ、何コッチ見てんだ？　……もしかして『やる気』に

なったのか？　なら外行こうぜ」
　何やらガンでも飛ばしていると思われたらしい。戦闘要求をいただきました。いらないが。
「やりませんって。そういうのを求めてるんなら、他所の誰かとやればいいでしょう？　『夜の斉川』なら、そのテの人間なんか『よりどりみどり』じゃないっすか」
　そうだ。暴れたいんなら、そこらのヤンキーとでも戦っててくれ。俺じゃなくていいだろう。
「いい加減飽きちまったんだよ。だから今度は『違うヤツ』とバトってみたいわけ。分かる？」
「だから意味分かりませんって。……ほら、明日も学校っすよね？　よい子は寝る時間ですよ？」
　話題を逸らしたい一心で、時計を指差し言ってみる。既に二時を回っている。
「チッ……ま、『普通のよい子』は寝るか……。じゃあな」
「おやすみなさい、晴樹さん」

「……ふぅ」
　――――ようやく重たい空気が取れた。
　つか、何であんなに俺に執着するかね？
　『あの時』は――――それなりに動いたとはいえ、別に格闘のプロって訳でもないのに……謎だ。

◇

　その後は平穏無事（※ただしシモネタ率高し）にバイトを終えた。
　帰宅してきた俺は、着替え入れのカバンから寝間着を取り出して

着替えつつ、少し考え中だ。

晴樹さん、やっぱり何か『ヤバい事』にでも関わっているんだろうか？

美菜さんの話じゃ、学校ではそんな様子もないって言うから……一体何がしたいんだ？

そういえば……『学校』ねぇ……。

――――――――ふと、頭に文が浮かんだ。今日の『日記』だ。

『今日は部活に行ってきた。相変わらず>>ＳＮＯＷ<<に蹴られる毎日。誰か、この子を何とかしてください（笑）』『あまりにもネタがないので、今日は俺の部活のメンバーを紹介します（今更すぎた？）』

『メンバーは全部で四人。まず、僕に加えて……蹴るだけが取り得のちんまい娘が一名。名誉のために誰とは言いませんが。』

違う、そこじゃなくて――――

『そして先輩二人は、和服が似合いそうな黒髪美人（絶滅危惧種？）のＭ先輩と、果てしなくバカな（もうバカという言葉では表現しきれない）Ｈ先輩――――中々個性的なメンツです。強いて言うなら問題は……人数がこれで全部って事だろうか。早く新入生来てほしい！』

――――そうだ、この二人。

そして、この文の『書き手』だ。

会ったことこそないが、以前『斉川に住んでますよ』とか言ってたはずだから……。

――――やや早計ではあるが、恐らく外れてはいないはず。

『部活の先輩』
これは多分『美菜さんと晴樹さん』の事だ。
つまり二人は、俺の『友人』――――>>ＨＩＢＩＫＩ<<と同じ高校……ってことなのか。
何か分かるかもしれないな……連絡、とってみるか？
と思ったが、まだ様子を見ておくことにする。そんなリスクを冒す必要はないだろう。
不用意に関わらせると……場合によっては、シャレにならないだろうからな……。

なら今日のところは――――――――そろそろ寝るか。
美菜さんが『探っている』って言ってたしな。
今のところ、晴樹さんが学校で暴れているなんて話があるわけでもないし、俺のほうから積極的に探りにいくのは……行き詰ってからでもいいだろう。
とりあえず、変なことになるなよ――――と、顔も知らない『友人』を案じつつ、俺の意識は落ちていった。

7. 『裏』の顔（後書き）

というわけで、ようやく話も動くかも？
いやー。ようやく出せた。リアルと話と、両方の意味で時間かかってしまった。
晴樹先輩……ベタかなぁ……？
と、ネガネガは良くないですね。

今日はこの辺で。

次回は……いい加減誰も覚えていない『あの人』出そうと思います。

それでは、ご意見ご感想、ご指摘あれば、よろしくお願いします！

8．『新入部員A』の話（前書き）

『あの人』を求めてやってきた、新入部員（予定）Aさんの独白。

……本当にその部活選んじゃっていいんですか？

どうやら、割とマジな理由があるようです。

8．『新入部員A』の話

これはきっと、よくある物語。

一人の少女が、一人の男の人に助けてもらった。
助けられた少女は、男にもう一度会いたいと願った。
そして、その祈りが通じた。
久しぶりに見つけた『彼』は……何も覚えていてくれなかった。
勘違いだった……。ただそれだけ。ありふれた物語。

そう、私にとっての『非日常』は――――

――――『あの人』にとっては『日常』の一コマだったのかもしれない。

ただ……それだけの話。

◇◇

まだ中学三年生だったころ……私は塾に通っていた。
住宅街にある家から徒歩で五分くらい。駅前にある塾だった。
いわゆる『個別』の教室で、授業は週に二回か三回くらい。夜の七時半から九時まで。
学力的には問題なかったから、最初は必要ないような気がしたけれど……『三年生になったら塾くらい通うものなんだよ！』と友達

からそそのかされて、夏休みになんとなく通い始めたのがきっかけ。

それでも、何となく通い始めていくうちに楽しくなった私は……秋の頃になると、すっかり塾通いが好きになっていた。

友達と一緒の授業時間で通っていた私は、授業が終わってからも友達と一緒に勉強したり、おしゃべりしたりして……そういう『放課後』が大好きだった。

どれくらい好きだったかといえば、時には深夜に差し掛かることもあったくらい。

深夜の駅周辺は少し怖いけれど、家から徒歩五分の距離だからすぐに帰れたし、あの時は……とにかく少しでも長く『二回目の放課後』を楽しみたくて、たまらなかった。

そんなある日、『放課後』も終わって……家に帰る途中で、私は忘れ物に気付いて塾に戻った。

時間は深夜の……一時前。まだ教室では、塾長さんが残って事務処理をしていた。

塾長さんが言うには、十月ともなれば……志望校に模試の結果の処理に、生徒と保護者との面談などなど……とにかく忙しいらしく、深夜になっても毎日のように残っていると愚痴半分に教えてくれた。

気をつけて帰れ。という塾長に『お疲れ様です』とねぎらいつつ、忘れていたノートとペンケースを持って家へと帰る。

帰り道は、闇。

夜のこの街は一言で言うなら――――不気味。

この時間になると、駅の目の前や大通り以外は、特別人通りも多くない。

街灯はあるけど、その近く以外は、真っ暗でよく見えない。音の方も自分の足音がはっきりと聞こえるほどの静けさを保っている。

そんな道でたまに見かける人といえば……大体が『不良さん』だ。たまに声が聞こえれば、だいたい出所は道の端に座りこんでいる人たちで、中には目の焦点が合ってなさそうな人もいたりする。
家が近いとは言っても……今日みたいに帰りが遅くなると、毎回こうして『五分間の恐怖』がやってくる。
それでも、たった『五分』で済むから、いつもなんとか我慢して……『楽しい放課後』を過ごしていられる。
毎回帰っている間だけは、少し後悔するけれど。

時間が経つほど、楽しかった時間と反比例するように凍り付いていく背筋と戦いながら歩きつつ、最後の角を曲がる。
もうすぐ『五分』――――つまり、あとちょっとで私の家。
『怖い時間』も、もうおしまい。

そうして、あと二軒……それだけ通り過ぎれば、もうゴール。
心の中で『ほっ』と一息。今日もなんとか無事に着きそう。

そうして私は何事もなかったように――――――――何かに引っ張られていた。

「〜〜〜〜〜〜〜っ！？」
突然押さえつけられた。誰かに狙われる理由は……ない。多分。
「喋るな。暴れるな」
どちらにしろ喋れるはずもない。口元に当てられたタオルみたいな感触と――――
「静かにしないと……刺すぞ？」
――――後ろから聞こえる、静かだけれど暗闇からそのまま出てきたような声に、完全に竦んでしまっていた。
無理やりに、一瞬抵抗を試みたが『刺す』と言われた頃には首筋

の辺りに、ひやりとした感触まであった。当たっているものが『何』かは、考えたくない。
原因が心なのか体なのかは分からないけれど、全く動けなかった。
そして、目隠しまでされて……しばらく歩かされる……永遠にも感じる時間だった。

声すらも出せない中で、私にできた事はといえば――――いるかどうかも分からない神様に、ただ願うことだけ。
夜更かしがいけないなら、次から早寝しますから。
不真面目だというなら、もっと勉強しますから。
好き嫌いも直します。家にも早く帰ります。だから――――

――――だから、お願いします。助けて下さい。

◇

そのまま、どこまで連れられたのか……拘束が緩み、目隠しも外され、ようやく光を得た私が目にしたものは、真っ暗な、住宅街の外れの景色と――――
――――さらに三人ほどの見知らぬ男たち。
もちろん助けてくれる様子なんてない。そこにあるのは、下卑た笑い声と視線だけ。
私の『願い』は届かず……いつのまにか、夜の闇へと消えていたらしかった。
『これから――――』とか『結構な――――』とか言われていた気がするけれど、反応できなかった。
そんな余裕すらなくなっていた私は、ただ檻の向こうの動物でも見ているような視点で……下品な笑顔の男たちに囲まれている自分を眺めていた。

現実を『捨てた』私の景色は――――――――――黒一色になった。

◇

突如、意識を取り戻す――――同時に『戻らない方がよかったのに』と思う私もいた。

「おい、こらガキ。いい加減返事しろって」

誰かの声がする。

これから私は何をさるんだろう？

……それとも、もう全てが『終わった』のだろうか？

呆然としている私に返ってきた答えは、ひどく単純なものだった。

「お前――――――――大丈夫か？」

「なんか妙な雰囲気だったから、とりあえず全員伸しちまったが……もしかして彼氏とかだったりしたか？」

違う……と、心では思ったが答えられない。そんな私に、もう一つ声。

「まあ、そういう『プレイ』だったら……その、悪かったな。もし違うなら、気いつけて帰れよ？」

『そんなことより、あの……名前……』と、取り戻してきた自我で精一杯伝えようとした声は――――

「じゃ、俺バイトあるから。送れなくて悪いな。『あの人』には世話になってるから遅れられないし、な」

――――そのまま遮られてしまう。

そう思った時、私はしっかりと『自分』が戻るのを感じた。『まだ……まだ何も返せてない！』と思考回路が告げる。

「あ……あのっ！」
勇気を振り絞って声を出す。そう、まだ何も……お礼さえ、言ってない。
「うぉっ！？　今まで黙ってたくせにいきなり何だ？　つか、俺バイトなんだが……」
「あの……名前っ！」
「あ？　名前？　いや、さすがに知らないヤツには教えないだろ。そういうの、学校で教わらなかったのか？」
助けてくれたかと思えば、名前すら教えてもらえない……何で助けてくれたんだろう。
「……あの……でも、恩返しとか……したいん……ですけど……？」
何となくだけど、体の調子や、服の感触から分かる。
まだ『何もされてない』――――この人が、守ってくれたんだ。
だから、今度こそ、力を込めてもう一度言おう。私を『護ってくれた』この人に――――
「あの……恩返し……させて下さいっ！」
そうして、言えた。途切れ途切れだけど、頑張れた。
「ああ……でもお前、その制服……多分中学生だろ？　恩返しがしたけりゃ、せめて高校生になってからにしな。ガキがこんな夜遅くにウロつくもんじゃないぜ――――ってうわ、やべっ、バイト遅れちまう。　じゃあな！　気いつけて帰れよ！！」
なんとか言えた……頑張ったのに……普通に断られた。
この人は、私を助けたことなんて……割と、どうでもよかったみたい。
それでもこの時の私は、同時になぜか良い方に意識が向いていた。
……そうなんだ。『高校生になったら』……恩返し、させてくれるんだ。
そう、次は……いつの日か、私が『あの人に恩返しする』番だ。

◇◇

でも、決意とは裏腹に、あの時は結局『あの人』のことについて何も聞けていなかった。
おぼろげに雰囲気は覚えているけど、どこの誰なのかも全く知らない。名前も、住所も、年齢も。
それでも、『恩返し』ができなくても、一度感謝の言葉を伝えておこうと思った私は、昼間や夕方、毎日のように頑張って探したりもした。
けれど……見つからなかった。
夜に探すのが一番見つかるんだろうと思うけど……夜に出歩くのは、心が受け付けない――――無理だった。

いくら探しても見つからず、名前も分からないから調べることもできず……気がつけば、受験も終わって高校生になっていた。
もちろん選んだのは近くの高校。また三年だけ、『猶予』が手に入る。
ついでに、あの人が居れば――――と考えたが、そもそもあの人が『もう居ない』可能性があることに気付いたのは、入学式の後だった。
結局三年を棒に振る予感がした。どうしてもっと早く気がつかなかったのだろう。

そのまま何日か過ぎた日のこと。
朝、登校中の私に……もう一度奇跡が起きた――――
――――『あの人』が、いた――――

全く探しても見つからなかったあの人。
あのあと、声すら聞けなかったあの人
そんなあの人に――――と思ったら、勘違いだった。
ちょっと見たところの雰囲気は似ていたけど、中身が全然違った。
その上『ストーカー』とまで言われてしまった。確かにその通りだったけれど。

でも――――昼間だけとはいっても、中学生の時に、あれだけ探して見つからなかった――――『あの人』
そんな人に、雰囲気だけでも似ている『その人』が、私にとって興味深い対象になるのは自然なことだった。
会うのが無理なら、その面影だけでも……そう思うくらい、纏う雰囲気が近い人だった。
ずいぶん性格は違うみたいだけど、『あの人』と『その人』で、いい『友達』になれるんじゃないかと思う。

そんな『その人』が『帰宅部』にいる、という事だけは分かったので、私も入部してみようかと思う。
もし、『あの人』と双子だとか、知り合いだったりとか……とにかく、何かしらの『接点』があれば……『あの人』に、一気に近づけるかもしれない。

そんな都合の良いこと……あるのかな？　と思いながらも、心のどこかで願ってみることにした。

◇◇

昨日から、入部届の受付が始まりました。
……昨日は失敗したけれど。今日こそは時間も場所も大丈夫。
私は、今日こそ入部届を……提出します。

ちょっと気合を入れて、ドアノブに触れる。
ひんやりした鉄の感触と、ガチャッという音。

まずは一歩。『あの人』のヒントを探すため、踏み出そう――――

「し……失礼しますっ……」
「へーい。帰宅部に何か用ですかぁ？　……ん？　あらまあ、カワイイ一年生じゃありませんか――――――――ってお前、この前のストーカー女じゃねぇか！？　もう出所したのかよ！？　保釈金とか払ったのか！？」

押し寄せてくる言葉に私は思う――――やっぱり、踏み出さないほうが……良かったの……かな？

8．『新入部員A』の話（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

さて、今回のお話は……あれ？

今回ばかりはシリアス（笑）を目指したつもりが、なんか微妙なことに……どうしてこうなった！　まあ、真面目な空気が出ていたことを祈りましょう。

そんなわけで、実にありきたりなボーイミーツｒｙ（むしろガールミーツｒｙだろうか？）でございます。

ところで、どうすればシリアスな空気になるんでしょうか。誰かコツ教えて（他力本願）

と、いつもの如くネガネガして……今日はこんなところで。

ご意見ご感想、ご要望（？）お待ちしてます！

次回からは、『あの人』を追い求める秋穂さんが……みたいな話が作れるといいなぁ……と思いつつ、まだ作ってません（笑）

誰の話にしようか考え中です。待ってくれてる人は、しばらく待ってね！

それでは。

9．　萩野さん、ご案内（前書き）

部室に居た俺の前に現れたのは……

げぇっ、ストーカー女ッ！？

誰かの罠か！？

9．　萩野さん、ご案内

ありのまま今起こっている状況を話すぜ……

俺は部員の皆より一足先に、部室に来ていたッ。

ヒマをもてあましているところに聞こえてきたのはノック、そして扉を開ける音だった。

でだ。入部希望者が来たと思ったら……

ストーカーだったッ……！

何を言っているのか分からねぇと思うが、俺にも全くわからねぇ……宇宙人とか未来人とか超能力者とか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねぇッ！！　もっとリアリティのあるヤツを垣間見ることとなったッ……！

というわけで、現在絶賛証人尋問中だ。

コイツは、一体何が楽しくて部活にまでストーキングすんだろうな？

◇

「……で、被告人。ふむ。ストーカーＡとしよう。名前は？」
刑事ドラマの取調べシーンのように、机を用意しガンッと上から叩きつつストーカーへ自己紹介を促す。まずは素性を洗おうと言う方針で脳内議会が固まった。
「……萩野　秋穂です。あと……えと、あの、ストーカーじゃ……ないです……」
いやそのりくつはおかしい。二秒で矛盾発生だ。
「黙らっしゃいっ！！　で、ストーカーＡ改め萩原君。先日君は何をした？　言ってみろやコラァッ！！」
俺は矛盾点に自分で気付かせてあげるべく、ストーカー新入生に優しく声をかける。
「わひゃいっ！？　え……えぇっと……」
優しく問い詰めたのにこの動揺具合。どう見ても『クロ』だな。言い逃れも何もあったもんじゃない。
しかし、縛り上げてやりたい欲求に駆られながらも、俺は小動物の告白を聞くために耳を向ける。あ、縛り上げたいといっても変な意味ではない。断じて。
「……先日は、朝から先輩を……その……こっそり追いかけてました」
うん、なるほど。よく分かりました。つまり――――
「どう考えてもアウトだッ！！　このストーカーレベルＭＡＸメス猿めがっ！！」
どこからどうやって考えても完璧なストーカーではありませんか。むしろストーカーじゃなくなる要素はないのか？
「ひゃわっ！？　……ご、ごめんなさいっ！」
ビクビクしつつも、飼い主に必死で謝る子犬のように縮こまる彼女。
俺の脳内の『嗜虐心を司る機関のようなもの』を、えらく刺激さ

れた。ここは欲求に素直になろう。つまり……もうちょっとイジりたいです。
「チッ……まあいい。だが事実はともかく動機は見逃さん。何でヒトのことストーキングしてくれやがったんだ？　これでもしお前が可愛いヤツじゃなかったら、問答無用でブタ箱にメスブタが一匹届いてたんだぜ。顔面偏差値を引き上げてくれた、先祖代々の優秀な遺伝子に感謝するんだな！」
「え……かわっ！？」
そこを拾って反応するんですか？　ていうか『川っ！？』って何だよ、俺に聞くな。
「全く……可愛い一年ガールかと思ってみれば、電波ゆんゆんのストーカーかつ新種の未確認生命体ってオチか――――ガフッ！？」
「部室に来たら……なんでアンタはいきなり女の子イジめてんのよっっ！！」
尋問を楽しむ俺の鼓膜に突然響くアニメ声と、頭に響く衝撃。毎度の事ながら頭がチカチカする。
「いってぇ……おいこらスノウ！　何しやがるっ！」
いつのまにかやってきて蹴ってきた幼馴染に抗議する。
「あらごめんなさい、よく聞こえなかったわ。だからもう一度……言ってみなさいよっ！！」
ゴゴゴゴゴ――――と、謎のオーラ的なものを発しているスノ……蘇芳さん。
どうやら、『俺を蹴った』はもう終了らしく、次なる課題『スノウ呼ばわり』に興味が移っているようだ。何この一方的に蹴られる痛さと怖さ。イジメってやつ？
とにかく、悲しみを超えるには暴走機関車『ユキサップ』を止めるしかない！
「自分、チョーシくれてました！！　マジすんませんした！！」
というわけで、全力で謝罪。これで今日も平和です。
「……ったく、しょうがないわね……いいわよ、許してあげても」

ミッション成功。命が繋がりました。同時に、なんか釈然としないが。
「……で、アンタはなんで新入生イジめてたの？　場合によってはもう一回蹴るわ」
びしっ、とこちらに足を向ける雪乃。そこには、カワイイ女の子の『生足』の感動など一切なく、存在するのはまるで抜き身の刀でも向けられているような恐怖感だけだった。
「いや、落ち着いて見てみろ！　コイツ、この前のストーカー女っ！！」
繋がった命の糸を切り落とすわけにはいかないので、必死に弁解を試みる。
「は？　アンタ何言って……あ、そういえばこの子この前――――」
ようやく分かってくれたか。うん、おじさん嬉しいぞ。
「この前アンタに絡まれてた子じゃないの……って、なんで二回も絡んでるのよっ！！　この変態バカっ！！！」
「――――痛いっ！？」
おい、どうしてまた俺が蹴られてるんだ？
って、そうか。単純なことを忘れていた……
雪乃がこの前俺を見たのは……ストーカーを問い詰めているところからだった。
そりゃ分からないわけだよな。でも何で蹴りまで付くんですかね？　蹴る必要なかったよね？　今。

その時、くすっ、と小さな声が聞こえた。
この一方的な暴力が行われる中、ストーカーが図々しくも笑っていやがった。
人が蹴られてるのに笑うとは、いい根性している。だが……
悪くない笑顔だった。ストーカーの腹いせに盗撮でもしてやればよかったかと思う。
ストーカーなんてやらかす根暗そうなヤツの割に、良い顔で笑っ

てやがる。

しかし、ストーカーの珍しい笑顔を見物していると……

「――――アンタは何見とれてんのよっ！！！」

「ぶふぉっ！？」

なぜかまた雪乃が蹴ってきた。いつも以上にいきなりの流れすぎて、処理が追いつかない。何？　なんなのこの子？　蹴らないと死んじゃう生物なの？

「おまっ、何しやがる！　そんなに蹴りたけりゃタイでムエタイの修行にでも行きやがれっ！！　雪ウサギの脚力は、もっと違うことに発揮しろッ！！」

「あ……その……ごめん、なさい……」

何でなのかは全く分からんが、今回は一切ツッコミがない。

しかも、蹴るだけ蹴った上で珍しく謝ってきた本人は……なぜか震えている。拳を握り締め、俯いたまま肩を震わせる雪乃。チビっ子の体が、縮こまってさらにチビっこく見える。

……普段は蹴りまくって暴れるくせに、こうも素直に『ごめんなさい』の態度を取られると普段のギャップからなのか、俺もどう返していいものか悩む。

「いや、まあ、気にするなよ。慣れてるし」

しどろもどろになりながらも、一瞬凍った空気を溶かしにかかる。

「……うん」

結局よく分からんが、ちょっとは立ち直ったらしい。

つか、普段からそれくらい素直になれ。命に関わるから。

「あの……それで、先輩……」

今度は、放置していた部員候補が雪乃とは対照的なしっとりした声を放つ。

「何だ？　ストーカー。シャバの空気に慣れたからといって調子に乗るなよ」

「結局私……部活、入れるんですか？」
もう『ストーカー』を訂正する気はないらしい。相手に諦められてはイジる気も起きず、こちらも残念だ。
「へぇ、『試験』知ってるのか」
「はい……噂だけ……」

『帰宅部』には入部試験がある。原因は今そこで凹んでいるチビっ子と……美菜先輩だ。

『雪乃＋美菜先輩』というのは、校内ではずいぶんと人気があるらしい。
中身はともかく、外面なら確かに完璧だ。二人が並ぶと身長から何から、見事なコントラストが織り成される。洋風の小さな金色と、それを包み込むような和風の黒。
……結論だけ言うと、こんな残念な部活だが、二人目当てで来たバカ共を落とすために毎年『入部試験』が開かれる。
最初は男子のみの予定だったが、女子の志望者もとんでもなかったため結局両方実施することになった。まあ全員落ちたけど。
残念なことに、このような残念な部活に来るなどと言ってのける人間は、９９．９％が二人目当てだ……だから俺以来部員増えてないしな。
そこで『試験』ってわけだ。
試験内容は、部長が言うには『面接して＞＞そういうオーラ＜＜があれば合格。数字にすると５３万くらい？』とのこと。なぜ５３万なのかとか、細かいところは……誰かに聞いてくれ。

「で、ストーカー改め……荻野さんだっけ？　まあ、『試験』受けるわけだ」
「そのつもりです……あと萩野です。荻野じゃないです」

『荻』と『萩』ではさすがに『お約束』すぎたらしく、あまり反応が芳しくない。
まあ、そんなことより試験
「とりあえず、部長が来るまで待ってくれるか？」
「……はいっ！」
ちょっと慣れてきたのか、声の緊張が取れてきた気がする萩原とやら。
「なら、私はお茶持っ……お、お茶無いから買って来るっ！！」
お茶と急須は部室にあるが……雪乃はさっきの『空気』を変えたいらしく、自販機を選んだ。ネクラストーカー女が明るくなったら、ネアカ暴力女が暗くなっちまったらしい。
……別に気にするなって言ったんだけどな。

◇

で、雪乃がいないってことは教室にストーカーと二人っきりか。
考えたところで、重大な失敗に気付く。
あれ？　これマズイんじゃね？　ストーカーと一対一……もしかして、何かされる？
結局名前以外は何も聞いていないんだ、目的が『俺を消す』だったりしたら……
「あの……先輩っ……！」
ひぃっ！？　待ってっ！　窮鼠猫を――――というが、小動物に逆襲されるほどに責め立てた覚えはないぞっ！？
「先輩！　……双子のお兄さんとか……、いらっしゃいませんか？
それか……『誰かに似てる』と言われたこととか……ありませんか？」
ビビった俺に続いた言葉は意外なものだった。戸惑いが隠せない。
何言ってんのこの子？
家族構成聞いてどうするつもり？

親元から離れてる上に……俺は一人っ子だぜ？
何の目的があって家族情報？
その上誰かに似てるなんて……あ。
「双子は残念ながら持ち合わせていないが、『似てる』と言われたことならあるぞ」
「……っ！」
息を呑む、というか、やたら真剣な顔でこちらを見上げる萩野。
何かを期待してるような顔だ。
「俺は――――『ベースの人に似てる』って言われたことならある。この前、昼休みの放送で流れてた曲出してたグループなんだが……『似てる』って言われた時はちょっといい気分だったぜ」
「……そう、ですか……」
聞くだけ聞いておいて、しょんぼりしやがった。ツッコミもくれないし……どうしろというんだ。
「で、何でそんなこと聞いたわけ？」
「そ、それは……その……今は、秘密で、お願いします……」
いや、個人情報引き出そうとしておいて、それは無いんじゃないですかね？
「まあ別に構わんが、ネットで個人情報バラ撒いたりはするなよ？
最近物騒だからって、家でブログ入る時なんかも気をつけてるのに、リアルで流されちゃ元も子もないからな」
「あ、はい……広めるつもりはありませんが……気をつけます」

そして、しばらく沈黙。
ほぼ初対面の女の子と二人……これが中々に気まずい。
こんな空気を打開するような一言が欲しいところだが、どうしたものだろうか？
「あ、あのっ……」
意外にも、ちょっと明るくなった萩野の声が沈黙を裂いた。
「ブログ……やってるんですか？」

明らかに無理やり話題にしましたって感じだな。
だが、気まずいよりはマシだと思ったので話に乗ることにした。
「ああ、『ブロング』ってやつだ。あまり更新はしないけどな。あと雪乃……あ、さっき俺のこと蹴ってた女のことな……アイツもやってる」
「あの……で、でしたら……アカウント、教えてもらえませんか？」
会ったその日に聞くのもどうなんだろうと思う。だが、どことなく出ている必死なオーラに気圧(けお)されて、
「ああ、いいぜ」
ついつい言ってしまった。
そして気がついてみれば……『ブロング』のことを教えるための連絡用に、と携帯電話の情報まで交換してしまっていた。
勢いで教えちまった。萩野とやらが詐欺に関わっていないことを祈る。

再び訪れていた気まずい空気。
そんな中、
「イヤッホオオオオオオオオオオオウ！　放課後だ！！　テンション上げていくぜ！！」
ノックもせずに、ドアをブチ開けて突入してくる人間が一人。
この沈黙を吹き飛ばした人物が誰であるかは、言うまでもない。
「きゃっ！？」
「ちょっ……晴先輩っ！？」
沈黙から一転して訪れた、ドアと音声の大音量に驚かされた。
だが、先輩にしてみればそんなことはお構いなしのようだ。
「オハヨウ御鏡青少年！　と……誰だお前は！！　敵襲か！？　誰ぞある！！」
ちょっとデジャブってやつだろうか。見知らぬ相手に殿様リアクションをとる晴先輩。さすがに気が合う先輩です。
「て……敵襲……ですか？」

そして萩野は先輩のボケに素で反応してやがる。地味に天然らしい。
「オマエのことだ闖入者ッ！　なぜ部外者がここに居るっ！！」
「ふぇっ……あの、入部希望、なん、ですけど？」
不安なのか、最後が疑問系になっている。
「では、試験があるのは知っているのかね？」
「はい、あの……面接？　みたいな噂でしたら……」
そう言っている萩野に対して、晴先輩は一言告げた。
「フッ……よかろうなのぜ。そういうことなら話は早い。早速試験だ！　ツマラン人間だったら叩き落としてやる！」
相変わらず脊髄だけで言葉を選んでいるようだが、要するに部長が言いたいことは――
――――――『試験開始』だ。

9．　萩野さん、ご案内（後書き）

ようやく更新。

さて……ええ、前回のようなシリアス？　な展開は僕が疲れます。
コメディ（？）ですし、もっとコメコメしよう！
と思ったのが、今回。

……できてなかったらごめんなさい。

そして、書く時間がとれないとれない。
影が薄すぎて、萩野さんを萩原さんと打ったりしたのは内緒。

それでは、ここまで見てくださっている奇跡的なお方、ありがとうございます！

１０．　入部試験なう（前書き）

萩野の入部試験開始。

ええ、もう残念な試験の気配がビンビンです。

１０．　入部試験なう

「あの……えと……が、がんばりますっ」
部長の『試験開始だ！』発言を聞いた萩野はおっかなびっくりながらも、意気込みが感じられる返事をした。
だが、彼女は重要なことを忘れている。
いくら入部希望者が多くて変な試験をやってるとはいえ、この部活は……
「よし。じゃ、ぬるっと適当に面接するぞ。雪乃クン書記ね。響クンは……面接官２号でいこう」
――――目的の所在すら分からない『帰宅部』なのだから。

机と椅子を用意して、俺と先輩が座り、向かいには萩野。
雪乃は別の手近な机の方へ行き、椅子も使わずにお行儀悪く座っている。
先輩に任命された『書記』だが、当然先輩が勢いだけで言っているから書く事などない。
さて、そんなグダグダ空気を切り裂く、栄えある試験官の第一声は……
「では、まず名前を述べたまえ。そして跪け、命乞いをしろ。小僧から石を取り戻せ！」
この人のことだから、そんなことだろうと思ってた。もう何も言うまい。
「え……えっと、萩原　秋穂です……。えと、その、あの、命だけは……助けて下さい……」
天然ってすごい。　今俺は奇跡の現場を目撃している気がする。
「む……、やるな萩野クンとやら。中々の逸材だ。１０ポイント！」

あまりに新鮮なリアクションに対して、部長的の中では何かのポイントが加算されたらしい。採点基準が革新的すぎて全く分からないが。

とはいえ、確かに状況的には部長(バカ)が一本とられたような格好だ。

どうせ『む……』とか言ってた時に考えてたことは『えっ？　ツッコミないの？』だろう。

「え？　……ありがとう、ございます？」

褒められてお礼を言う萩野。

さすがに最後が疑問形になっているが……謎のポイント制にもツッコまない、このボケ殺しっぷりは……『部長殺し』の価値だけで入部させてもいい気がする。

「さて、ツカミは合格だ。では、次の質問に移ろう」

小学生が設計した飛行機にジェット積んで飛んだらこんなことになるだろうか。

つまり――――この入部試験は一体どこへ向かうのだろう？

……というか今更だが、明らかに遊びたいだけだな、部長。

などと考えた時に、ふと自分の『試験』の時の記憶が蘇った。

（……なあ雪乃）

隣の机に（文字通り）腰掛ける雪乃に確認することにした。実に便利なアイコンタクト。

（……何よ？）

（俺の時は確か……自己紹介で一発合格じゃなかったか？）

そう、自己紹介と言われて、名前を言ったら顔を見られて……それだけで合格だった。

（あー。そう言われてみれば……ホントに基準が分からないわね……）

俺ですらそうだったのだから、萩野なら当然『顔で合格』だと思っていた。

それとも、俺の場合は『雪乃の知り合い』だったからか？

となると、第一印象で決めるってわけでもないのだろうか……まあ、それよりも次の『試験』だな。

「では、次の試験だが――――まずはちょっと顔よく見せろ。さっきから俯き気味でよく見えん」

何だろう、やっぱりこの部活は顔がいいと受かるんでしょうか？

「え？　……あの……はい」

そう言って、相変わらず脅えたような動きで、さっきまで伏せ気味だった顔を上げる萩原。

よく見るとやっぱカワイイですね。ひっそりと図書室の隅で本でも読んでいたら結構絵になると思う。

「どれ、苦しゅうない、近うよれ……っ……お前っ……！」

先輩のほうはなぜか『初対面の新入生の顔』を見て驚いている。

ていうか、もはや『ガンくれてる』状態に近い。

カワイイからガンつけたのか？

相変わらず晴先輩の行動はイマイチ分からん。見てる分には面白いけど。

「……あの、何か……？」

不安度五割増しの萩野（当社比）。

まあ、細身だが筋肉質で、俺より背も高いし……無意味な威圧感のある晴先輩だ。そんなのに睨みつけられたら気圧されるのも分かる。

ていうか、ただでさえ相手は怖がり小動物なんだから、もう少し丁寧に扱ってあげて欲しと思う。

睨み付けたようにタメたまま、晴先輩は一言。

「お前――――――――合格っ！！」

「……ほぇ？」

さすがに予想外だったらしく、ずいぶんとマヌケな声が聞こえた。
「だ、か、ら、合格っ！　今日からでも明日からでも、気が向いたら来ていいぞ。入部届は……担任にでも出しておけばいいさ」
過程をぶっ飛ばして、合格宣言を二度も繰り返す晴先輩。
「……何か良く分からないんだけど、おめでとう？　萩野さん」
合格理由すら分からず、俺と一緒にフリーズしていた雪乃だが、祝福の体勢のようだ。
雪乃に先を越されたが、俺も新入部員に声ぐらいかけてやらなくては。
「おめでとうストーカー……改め、萩野」
「……はい、皆さん……ありがとうございます！」
シッポが付いてたら、多分千切れるほどの勢いで振りまくってるだろう。
ここまでストレートに喜ぶほどのもんなのか？
「私……これから、がんばります！」
さらに、所信表明も行っている。

そんな、喜びとやる気でいっぱいの新入生に、俺達がかけてやる言葉は決まっていた。

「「「いや、頑張らなくていい（わ）。だって帰宅部だし」」」

やっぱこいつ、入る場所間違えたんじゃないのか？

やっぱ文芸部とか、吹奏楽部とかさぁ……ね？
やる気あるなら他所行った方が有益だと思うんだよな……。

◇

あのあと、今日の活動は萩野を加えてグダグダ喋って終わった。
やる気がある部員が入っても、グダグダして終わるのは一緒だった。ああ素晴らしき怠け具合。
ストーカー萩野は、結局犯行動機を吐くことはなかったが終始楽しそうだったし、『再犯はしません』との言質を確保した。ならばもう言うこともあるまい。

さて、こうして部活に新入生が入りました。
ネタにするしかあるまい。
というわけでパソコンを取り出し、『ブロング』へ――――さっそく作業にかかる。

『新着メッセージが一件あります』
おお、行動が早いな。
『＞＞差出人名：ｆａｌｌ＜＜　こんばんは。萩野です。これからよろしくお願いしますっ！』
……秋だから＞＞ｆａｌｌ＜＜か。どこかで似たような名前の付け方をした人間がいた気がする。
『さっそくフレンド登録させていただきました。更新楽しみにしています！』

コイツは何か勘違いしている。
お前が楽しみにできるような『更新』がされると思っているのか？
今日の俺の日記のタイトルは、既に決まっている。

『ストーカー入部なう』

ん？　もう終わってるって事は『なう』じゃないのか？　ま、いいよな。

さて、本文を打ち込んで――――寝るか。

今夜もオヤスミ。すやすや時間、だな。

１０．　入部試験なう（後書き）

話短いっ。

区切りがいいのでこのあたりで。

記念すべき１０話……だが、喜べないっ。

俺に描写能力があればっ……もっと面白い話になったはずなのにっ……！

とまあ、ネガネガティブティブしつつ、今日はこのあたりで。

次回はまたキョウさんと、狂った晴樹さんが登場するかもしれない。

あ、でも晴樹さん狂ってるのは――――ネタバレ良くないっ！

では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0708o/

『帰宅部』へようこそ

2010年10月15日04時25分発行